律人日隆

藤丸哲哉著

325
178

始

偉人日隆

325
178

小引

隆尊の傳記に關する著述は、寫本二三部の外、現今公表されて居るもの殆んど絶無である。然かも其の寫本も、或は教理を力說し、或は讃德を重頌し、爲めに事實を附會し曲解せる點が少くない。從つて系統、年代、事跡等に異說紛々、頗る判斷に苦しむ處が多いのである。故に此んな小冊子をものするにも一通りの苦勞ではない。全體傳記には二種の書き方がある。其の一は事跡を叙述するもので、其の二は事跡を評論するものである。僕のやり方は即ち重に後者に傾いて居る。然し譬へ評論であつても其の論據を事實に置なければ。其は一種の戯論に過ぎない。其こで僕は傳記を評論するに時代の眼を以て見たのである。

大正
2. 3. 28
内交

然しながら前述の樣に其の史料甚だ缺しきのみならず、僅かの中に矛盾反對の點が多いから、是れを材料として出來た僕の研究も甚だ當にならぬものであらう。されば僕は研究の結果を發表したものではない。寧ろ研究の方法を示したものに過ぎぬ。只だ願はくは此の著述が多少にても傳記研究の方向を示す事が出來ればマア幸である。

愈率の間、よく本書を出版し得たのは、一重に異友蒼岳君の助力に依る。茲に厚く御禮申して置く次第である。

東都獅子窟にて　著者しるす

隆尊四百五十御遠忌の日

偉人日隆

目次

一、偉人と時代……一
二、隆尊出世當時の世間界……八
三、隆尊の血肉系統……一六
四、隆尊出世當時の出世間界……二六
(イ)世間界と出世間界との關係
(ロ)佛教各派の狀態
五、隆尊思想系統……三九
六、時代精神の三大通弊……四八

七、隆尊の宗教改革……五三
八、隆尊の新世界……五七
(一)上人の平等主義
(二)上人の精神主義
(三)上人の八品正意主義
一、日蓮各派の由來
二、各派の主張及び其の略評
三、隆尊の根本思想
九、結論……一〇五
十、隆尊御一代年表……一一〇
以上

偉人日隆

一、偉人と時代

昔から時代は偉人を産み、偉人は亦た時代を作ると申して、偉人と時代とは切つても斷れぬ深い因緣があつて、到底之を離して考へる事の出來ないのは、今さら云ふ迄もない事である。然し單に偉人と言つても、色々種類があつて一通りではない。或は戰爭肌のもあり。或は經濟肌のもあり、或は學者肌や藝術肌の如き、精神上の偉人もある。之を我國近古の歷史に就て譬へて見れば、秀吉や家康は即ち戰爭肌の偉人で、江戸の紀伊國屋文左衞門

戰爭肌の偉人

や大阪の炎木屋幸齋の如きは經濟界の偉人であらう。又た學者としては朱子派の林羅山や陽明派の近江聖人の如き、藝術家としては繪畫に狩野常信、俳優に初代團十郎など、皆な其れ〴〵其の道にかけての英傑である。然しながら之等の偉人は果して產れながら偉人であつたかと云ふに、本より栴檀は二葉より香ばしと云ふ事があるから、多少普通の人とは異つた點もあつたらうが、決して偉人の冠を蒙つたまゝ母の胎內を出たのではない。一代一世に拔ん出たる彼等も、必ずや彼等の生れたる處の境遇や、其の時代に依つて、偉人になる樣に養成せられたのである。彼の英名四百餘州にまで轟かしたる太閤も、戰國時代の如き弱肉强食の世に生れてこそ、今日彼は偉

經濟肌の偉人

人とまで尊信せらるゝに至つた、若し彼をして此の明治の太平に生れしめたならば何うであらうか。恐らくは矢剱の橋上で一生乞食して終つたかも知れぬ。されば彼の勢力も彼の事業も共に戰國時代の賜物と云ふ可きである。然らば偉人となるには只だ時代のみで事が終むかと申せば、又た其んな理由にも參らぬ。必らず其の人によく時代の機に乘ずるだけの能力がなくてはならない。秀吉は能く戰亂の世を了解し、而して其の時勢の要求に相應する行動を爲した故に、玆に始めて偉人となる事が出來たのである。此の事を經濟肌の偉人文左衞門に見るも亦た同樣である。彼れ紀文の如きも、昇平の日久しく武士ともあらう者が、劍は鞘に鏽び鎧は櫃に朽ち、閑暇無事只

だ遊樂奢侈にのみ耽り、且つ此の時は雨の如くに天災來り人災又た度々花のお江戸を荒し、天然の產出は人間の需要をしてなか〳〵滿足を與へる事が出來ない樣になり、之が爲め貨幣の品質が下落して物價大に騰貴したる元祿の頃に生れてこそ、あれ程の富豪ともなる事が出來たのである。勿論紀文には其の時代の經濟界を見拔くだけの能力があつた。然し此の樣な時代であつて始めて其の能力が適用せらるゝ事が出來たのであるから、若し今日の如き黃金萬能の世であつたならば、文無しの彼は必らず九尺四面の裏長家住居で一生を終つたであらう。

斯く其の時代の要求は其の偉人の生れた所以であつて、偉人の行動は悉く時代の然らしめたるものとせば、吾人

人間としての我が日隆上人は宗教界の偉人也

は偉人の眞面目を明に知ろうとする時は、是非とも其の偉人の生れたる處の時代の如何を意得なければならぬ。時代を了解せずに偉人のみを知らうとするは、恰も木に依つて魚を求むるが如く、如何に思案投頸しても到底不可能の沙汰である。以上偉人を研究するに就ては、如何なる方法を取つて研究す可きかを一言述べたる次第であるが、是れから茲に御紹介申そうと思ふ一人の宗教肌の大偉人が、我が日本佛教史上に出現して居る。是れ外でもない即ち慶林坊日隆上人其の人である。

日隆上人は本門法華宗の開祖であつて、宗內僧俗諸子の間には誰も知らぬものがないのである。されば我輩が茲に述ぶる事は、恰も釋迦に說法の類かも知らぬが、然

しながら熟々惟るに古來今日まで傳へられたる上人は、全く神格化されたる日隆上人であつて、人間としての上人ではあるまいかと思ふ。言葉を換へて云へば、此の有爲轉變の無常世界を離れたる上人に就ては、今迄で種々光彩ある傳説が存在して居つたけれども、有爲の世界と密接の關係を有する處の上人に就ては、一向説く者がなかつたのである。されば古來只だ上人を神秘的にのみ解釋して、其の歴史的の方面は殆んど無視せられて居つた。然し吾人は此の宇宙間にありとあらゆるもので、系統がなくて存するものは決してなく、從つて此の無常世界から全く絶離せるものは金輪際あるまいと思ふ。非情ですら斯の如くであるから、況して有情、然かも人類に至つ

ては、何うしても其の系統と此の地上とを等閑視する事は出來ない。佛陀の如き日隆上人とは云へ、木の股から生れたならばいざ知らず、苟も生を母胎に受けたる以上は、土人形の如く偶然に出世したのでもなく、亦た虚空の生活もしながつたのである。唯だに上人の肉体のみならず、其の精神も又た斯の如くで、決して無系統で且つ超越的のものは一分もない。されば茲に吾人は社會に依て作られ、時代の要求に應じて出世せられたる、立派に相傳を有する偉人隆尊を發表せんと思ふのである。依て我輩は敢て潜越の所業をも顧みず、上人を紹介すと公言せる所以、まんざら根據の無き事でもあるまい。

二、隆尊出世當時の世間界

天下三分の形勢

そもや隆尊出世當時の世は如何にと申せは、此の時の政治界は實に結ぼれ解けぬ麻糸の様に、亂脈極まる有様であつた。頃は御醍醐天皇の延元元年足利尊氏は、北朝の天子を立てゝ自ら征夷大將軍となり、幕府を京都室町に開き、兵馬の權を統べてから後、一時天下の形勢は三分に分割された。即ち將軍方と宮方と佐殿方との三である。將軍方とは北朝の方であつて、其の根據地は京都にあつた。宮方は即ち南朝の事で、吉野を中心として楠、和田、北畠の諸族が居つた。又た佐殿方とは右兵衛直冬と左兵衛督直義とが其の張本人であつて、直冬は中國か

ら大軍を率ひて京都に攻め上り、將軍方と非常に戰爭したる結果遂に敗北し、佐殿方は間もなく絶へてしまつた。が然し南北兩朝の戰爭は何時も絶ゆる事はなかつたのである。然るに三代將軍義滿の時に南北朝合體となり、一ト先づ天下太平の世となつた様であるが、是れはほんの表面のみで、實は到る處修羅の街であつた。鎮西には菊地氏や島津氏、東北には新田の餘族、畿内には北畠氏や、楠氏などが、皆な陰かに南朝に氣脈を通じ、足利幕府に手向ひをして居つた。降つて義持、義量、義敎の治世になつても、尙ほ南朝の舊臣が風雲の機を望み、あくまでも北朝を斃さんと心掛けて居つたのである。加之足利一家の中にも多くの内亂を生じたので、先づ其の重なるも

社會道德の衰頽の有樣

のを擧げて見れば、彼の義滿の時には、大内義弘が泉州境に於て將軍に反抗したる應永の亂があつた。次に義持の代には鎌倉管領上杉禪秀の亂が起り、義敎の時には其の弟の義昭が幕府を奪はんとし、又た結城合戰の如き大戰爭があつたのである。

此の樣に足利時代に於ては、幕府の中央集權は全く其の實力を失ひ、日本の天下は悉く戰場に化して、上は公卿百官から武士は云ふ迄もなく、下は平民百姓に至るまで、屢々生死不明の境に驅られて、一日も枕を高くして睡る事は出來なかつた。然も此の時代の戰爭は南北朝の爭を始めとして、甚だ不倫極まるものであつた。即ち朝の味方も夕には敵となり、骨肉相爭ひ君臣鋒を交へ、子

は父を殺し臣は亦た君を害し、只だ力のあるまゝに奪略を事とし、忠孝仁義の道は全く地に墮ち、權謀術數只だ利を主として、義理人情などは屁とも思はなかつた。されば强盜山賊無賴漢の徒は、此の機に乘じて非常に良民を苦しめたのである。其の頃誰かは知らぬが、京都二條河原に落書して貼り付けたる者があつた。其の文に曰く。

この頃都にはやるもの、夜討、强盜、僞倫旨、
召人、早馬、虛騷動、生頸、還俗、自由出家、
俄大名、迷者、安堵、恩賞、虛軍、
本領はなるゝ訴訟人、文書入れたる細葛、
追從、讒人、禪律僧、下剋上する成出者、
器用の堪否沙汰もなく、漏るゝ人なき決斷所、

着つけぬ冠、上の衣、　　持ちも習はぬ笏持ちて、

内裡交はり珍らしや（下略）

斯の樣に世の中は渾然として亂れつゝある時であつても、獨り足利一門は位人臣に超へ、勝手氣儘に大權を取つて、驕僭至らざる處なく、人間の種でありながら、畏くも行幸に准へ、或は上皇に擬し、日夜淫樂にのみ耽けて居つた。彼の支那から日本天子に封ずと云はれて、大に得意になつて居つた處の義滿は、花の御所や金閣寺などの立派なる遊園所を作り、義持も亦た明けても暮れても猿樂や能狂言の間に日を送つた。義量は例の如く酒色に沈溺し、暴飲の結果遂に若年にして死んだ。次の將軍義教は性質驕慢、彼の有名なる本法寺日親に燒き鍋を蒙

らせたる人であるが、赤松貞村なる美少年を非常に愛し、其れが基となつて遂に滿祐の第宅に於て騙し打ちにされた。次に義勝は八歳の時馬から落ちて死んだが、是れとても骨無し將軍であつたに相違ない。八代義政に至つては奢侈も其の極度に達し、滿つれば缺くる世の習ひで、應仁の亂以來幕府の權力は全く衰へ、遂に戰國の世となつたのである。

上將軍たるものが此の如くであつたから、其の部下たる諸國の大名も、之に眞似て非常に贅澤三昧をやらかした。此の間にあつて日々に凋靡し、月々に困窮するものは獨り天下の平民であつて、當時の平民は一方では戰爭費を取り上げられ、其の上戰役に服さねばならなかつた

し、又た一方では武士の遊宴費を取られ、其の外宮殿や別莊の工事に使役されねばならぬと云ふ有樣で、實に氣の毒千萬だのは此の平民であつたのである。剩へ此の時代は天災地妖遍く天下に充ち、廣く地上に迸ると云ふ始末で、彼の延文康安の大地震、旱魃、飢饉もひどかつたが、就中尤も甚だしきは寛正の頃で、京都の附近のみで其の死するもの二ケ月の間に八萬人、一日に八九十人の多きに及び、清水の僧が五條橋下に死屍を集めて塚を築くに、其の數一千二百餘に至つたとの事である。然し天災は人力の如何ともする事が出來ないが、細民の災害としては天災よりも却て人災の方は恐しかつた。即ち重稅、勞役、兵火、略奪、盜賊等一として皆な良民困苦の種で

ないものはなかつた。されば多少志あり亦た學問のあるものは、高位高官の公卿と雖ども田夫野人と一處に山奥に忍んで仙氣を味ひ、乃至武人であつても桑門となつて浮世の荒浪を脫れようとした。故に當時出家隱遁は一種の流行とも思はれた位である。彼の一天萬乘の後花園天皇でさへも。

殘民爭採首陽薇、　處々鎖爐閉竹扉、
詩興陰酸春二月、　滿城紅綠爲誰肥、

と遊ばされて世の有樣を歎かれたとの事である。之を以て見るも、其の如何に悲慘なる當時の狀態であつたかを想像する事が出來るのである。

三、隆尊の血肉系統

我が日隆上人の一生涯は、斯かる殘酷なる時代であつたが、其の誕生は、恰も後小松帝(北朝)の至德二年十月十四日、既に南北兩朝合戰の最中、足利三代將軍義滿の盛り榮華に耽けて居る頃で、其の示滅は後花園帝の寛正五年二月、八代將軍義政の時即ち戰國時代の始めである。

然らば上人の肉體上の系統は何うであるかと云ふに、上人は清和天皇の末裔であつて、上洲桃井の莊に住んで居つた處の桃井家に生れたのである。今便利の爲め上人の肉的系統を圖解すれば左の如くである。

桃井に二種の別ありて日隆上人は上州桃井に屬するが如し

桃井直常

清和天皇九代の孫—義國—┬義重(眞田の先祖)
　　└義康(足利の先祖)┬義氏
　　└義助

義胤—頼直—┬直常—┬尙儀—直之
　　└直信　└日存—長直(日隆上人)
　　└日道

清和天皇十三代の孫源義胤が始めて桃井の姓を名乘つて以來、代々の子孫は皆な足利氏の幕下に屬した樣である。然るに此の上洲桃井の外に三洲桃井と呼ぶものがあつて、此の一族は早くから新田氏の幕下に從ひ、南朝に志を向けて居つたとの事である。處が或る隆祖傳には上洲桃井に屬する直常を、南朝の忠臣楠公に謁して謀略を受けたる人であると書いてあるけれども、是れは恐らく

は三洲桃井と上洲桃井とを混動したる結果誤解を生じたのか、或は隆尊の傳を飾る爲めに特に事實を僞つたのだらうと思ふ。勿論直常の南朝に屬したる事は全く事實であろうが、其れは遙に後代の事で、正成や義貞の討死してからの話であるから、直常が正成に謀略を受くる道理はない筈である。始め直常と直信は、尊氏の弟鎌倉管領足利直義の部下となつて、一方の大將であつた。特に播磨守直常は性質剛勇、直義部下の重鎭と仰がれ、越中の國守となつた。太平記に依つて見れば、彼の高師直が鹽谷判官高貞の戀女房たる後醍醐帝の御外戚早田宮の女、即ち芝居では顏世御前と云ふ美人に懸想して、高貞を無きものにせんと謀り將軍に色々讒言した。然るに高貞陰

かに之を聞き大に驚き、本國なる出雲伯耆に歸つて、謀叛の旗を揚げんものと直に京都を逃げた。此の時に直常等は將軍尊氏の命を奉じて、高貞の跡を追ひ攻めて遂に亡ぼしたのである。されば直常は芝居でする忠臣藏などにも關係のある人で、所謂桃井若狹亮と云ふのは即ち此直常を假用したものである。然るに足利直義は、當時飛ぶ鳥をも落さんばかりの勢權職高師直と意見の衝突を生じ、之が爲め兄尊氏に疎んせられ、遂に南朝方と合體して北朝と戰爭する樣になつたので、直常も亦た南朝に屬する事となつた。處が直義は一時頗る勢力を得て、師直の一族を悉く平げたが、後ち次第に勢衰へて遂に尊氏の爲めに毒害せられたのである。時に中國の探題足利直冬

は元來武將の嫡家でありながら、師直の爲めに退けられて居つたが、遙かに南朝に應じ直義と心を合せ、九州及び中國の兵を率ゐて京都に攻め上つたので、直常と高經とが共に直冬の命に應じて、北國の軍勢を率ゐ京都に押し寄せたが、此れも利がなかつた。其こで直常は又も越中に退ひて居つたが、後ち義貞の三男武藏守義宗の幕下に從つて度々軍旅に出掛けた、が然し何時も思ふ樣には行かなかつた。又た尾張守高經は足利氏の一門斯波氏の子孫であつて、越前の守護に任ぜられ、尊氏の爲めに頗る重ぜられたる人であるが、何故北朝に向つて弓を引く樣になつたかを尋ねて見れば、高經は曾つて南朝の忠臣義貞を討取つた時に、源氏の重寶なる鬼丸鬼切と云ふ

二振の太刀を手に入れた。所が其の太刀を將軍に所望せられた爲めに、止むを得ず僞物を作つて差出した處が、其の事が將軍に知れたる爲め、將軍は以ての外に憤り、高經の忠功拔群なるにも拘はらず、さまでの恩賞もなかつた。高經も亦た之を非常に怨み、是れより尊氏を敵視する樣になつたのである。

されば直常と高經とは、共に足利の一門であつて親類上の關係を有するのみならず、高經は越前の國守、直常は越中の國守であつて隣國上の交際もあつた、加之共に直義に從ひ直冬に附き宮方に馳せ參じて、あくまでも將軍家を倒さんとした。此の二人の志と云ひ、亦た行動と云ひ、殆んど同一歩調を取つて、其の間に一歩も踏み外

さない觀がある。之を以て見るに此の兩家は、尤も親密に交際して居つたに相違ない。然るに高經も直常の如く、數度の合戰に敗北し、遂に北朝と和睦して、自ら入道して道朝と呼んだ。高經の三男に斯波義將と云ふ者が居つて、此の人は文武兩道に達し、將軍に招請せられて義詮、義滿、義持の三代に事へて、執事となり或は管領となり、政治上に非常なる手腕を振つた。義將の子義重、義重の子義淳、義淳の子義郷など、斯波家の子孫は代々足利幕府の補佐となつて居つたのである。之に反して直常の子に直尚(或は直和とあり)なる者があつたが、直尚は何處までも南朝に從つたので、前に桃井家と斯波家とは互に矛を交へなければならぬ事となつた。直尚は義將と戰つて

敗死したが、其の子尚儀の代に至り、即ち康歴二年の事、斯波氏と和睦し、義將の女益子を娶つたとの事である是れ果して如何なる理由で和睦する樣になつたか、其の邊の史實は明でない。南北朝合體は明德三年の出來事であるから、此の兩家和睦の上には何等の關係もない筈である。恐らくは尚儀は義將の爲めに、舊交の親密と云ふ事を口實として、兩家對抗の不利益を說かれ、其の上彼の女までも賜つて、遂に北朝に降參したのではあるまいかと思はれる。其は兎も角も此の尚儀と益子との間に、直之と長直と申す二人の子があつたが、其の內弟の長直こそ後ちに日隆上人となつた御方である。

長直は幼名を長一麿と呼び、元より武門の家庭に養は

れて、此の戰亂の浮世及び榮枯盛衰の事實を目前に見る事が出來た。而して一面では社會道德の衰頽を感じ、亦た他の一面では生滅無常の事相を觀じて、早くから出塵脫俗の思を懷ひて居つた、殊に長直は少時より非常に學問を好まれたが、當時の學問は僧侶の手にあつたから、寧ろ武士となつて骨肉爭の憂目を見んよりも、僧侶となつて文學で身を立て樣と思つたのである。加ふるに母の益子や其の乳母は、非常なる日蓮宗の信者であつた故、從つて其の影響をも受け、且つ其の出家するに就ても充分外部から助けられたものと思ふ。之等種々の源因が集つて、長直の心には金輪際出家せにや置かぬと云ふ一大決心が出來き遂に父尙儀の意志にも背ひて、越中射水郡

日隆上人の出家は自由意志の決定に依るものにして必然の結果にあらず

淺井鄕遠成寺の住職慶壽院を師と賴み、斷然黑衣の身となつた。時は正に應永元年の事である。此の慶壽院なる者は如何なる人であるかと云ふに、傳說の傳ふる處は頗る不明であるが、日芳上人の隆祖德行記には次の如く書いてある。即ち

此の妙本寺に、御開山國本の御師匠遠成寺慶壽院の兄弟御兩人、御出家を遂げさせられ、妙本寺塔頭に御座す。所謂好學院日存上人、精進院日道上人是なり。此御兩所は御兄弟にして、而も御師弟なり。と

此の說より見れば、慶壽院は存道兩師とは兄弟の關係あり、從つて日隆上人とは伯父甥の血緣を有するものゝ樣である。斯くの如く長直の出家する動機は、上行菩薩の

御再誕として、先天的に本來出家となる可き運命を持つて居つたのではない。必らずや斯かる時代の感化と又た家庭の境遇から、作り上げられたものである事は、敢て我輩の贅言を要せずとも、其の間の歴史を見れば、尤も明かなる事實だろうと思ふ。

四、隆尊出世當時の出世間界

(イ) 世間界と出世間との關係

前述の如く時代は長直をして發心せしめ、名を深圓とまで改めて數年の間、山僻に居つて空觀の月を眺め、只だ一意專念學問を勵み、此の時既に天臺の三大部をも悉く暗誦したとの事である。かくする間に生滅の理は、彼が親愛なる父母をも、黄泉の國へと旅立たせた。即ち父尚儀公は、彼の得道せる年即ち應永元年、母益子は同四年の春に死んだのである。あゝ天にも地にも、只だ一人となつた深圓の悲しみは、まあ何んなであつたらう。彼は熟々世を觀じて、一大奮發の念が起つた。謂らく孤獨の身にして、此の儘に朽ち果てんも本意にあらず、一は釋尊の本懐たる妙法の爲め、一は兩親の報恩菩提の爲め、いで衆生を火宅の中より救濟せんとて、遂に住み馴れし古郷の空を後にして、一笠一蓑千山万岳を踏み破り、文物の發達せる都下にやつて來た。斯くて深圓は愈々社會の初舞臺にと乘り込んだのである。然るに曾つて越中の

山間に居つた間こそ、空々寂々として、比較的に安心を求むるよすがもあつたが、廣い世間に出で見れば、自ら浮世の隱れ場所として撰んだ處の出世間界は、却て世間の動搖よりも一層烈しかつた。實に片田舍の出世間界は恰も都の世間で、都の出世間と田舍の世間とは、全く同じ有樣であつた。否な都の出世間界は越中の世間よりも、數等俗めいて居つたのである。

然らば何に故に都の出世間界即ち宗敎界は、斯くまで腐敗して居つたかと云ふに、全體此の時代の宗敎界は、時の幕府と尤も親密なる關係があつて、當時の僧侶は幕府の顧問となり、敎導者となり、亦た爲政者となつた。是れが抑も宗敎界の墮落したる一大源因である。かく僧

學問上の必要

侶共が武門の信任を得たるは、我輩は玆に三ッの重なる理由が存するだらうと思ふ。其の三理由とは

(一)は當時は武士の世であつたが、元來武士は弓矢を取つては御手のものであるけれども、文學上の事は一切知らない。又た其れを知らうとする餘猶もないのである。然るに苟も爲政者として人民の上に立つ者は、必らず古今の治亂、東西の變革を充分に意得て置く必要がある。處が之を能く意得て居る者は、世に只だ公卿と僧侶あるのみであるが、公卿は動もすれば門閥を鼻にかけて、武士の勢力を押へんとする傾きがある故に、幕府は公卿に依賴する理由には參へらぬ。其こで脫世の身である處の僧侶は、獨り武門の要求に適當して居つたのである。

慰安上の必要

其の(二)は只だに爲政上の必要のみならず、又た自己の慰安を求むる上から、僧侶を厚く對遇したのである。前述の樣に此の時代は、全く現身に修羅道に墮ちて、武士も町人も明日をも知れぬ命であつたから、理想も目的も乃至守錢貯財も、何んの甲斐もなき事であつた。即ち有る時は有るに任せて、酒池肉林の嬉樂に耽けると云ふ一般の人情であつた。彼の位人臣を超へて居る將軍と雖ども、又た此の感のない事はない。故に代々の將軍は斯る不安の念を、色や酒の間に閉ぢ込め樣としたが、酒色は瞬間の解脱であつて、醒むれば再び元の修羅の苦痛に惱まされねばならぬ。されば其の醒めて居る間だけは、解脱界の媒介者たる僧侶の御氣嫌を取り、而して其の救ひの手

政略上の必要

に縋るより外は無かつたのである。

(三)の理由を申せば全體當時の宗教界は、公卿や武士の陰遁場であつたから、僧侶は曾つては社會の上流を占めて居つた處の才識兼備の志士の半生であつた。其れ故に僧侶は多く諸大名と親しく交際し、諸大名も又た頗る僧侶を弄んだので、若し一度僧侶が動き出せば、又た諸大名も動き出すと云ふ有樣であつた。然るに幕府は天下を統一するには、諸大名を服從せしめねばならぬが、此の諸大名を自由にするには、先づ僧侶をまるめねばならぬと云ふ必要が起つた。且つ諸大名の方にても亦た此の通りで、將軍の思召を得るには、先づ將軍の尊信する處の僧侶の氣嫌を伺はねばならなかつた。只だ此の間に在つて

獨りまる儲けしたのは、即ち僧侶御自身であつた。されば此の機に乘じて、僧侶は非常に我儘なる振舞を働いたのである。

(ロ) 佛教各宗の狀態

禪僧の流行

以上の三理由で、足利幕府は代々佛教信者と云ふよりも、寧ろ坊主崇拜であつた。扨目なしの僧侶は、之を利用して名聞利欲にのみ窮々として、愈々俗世の臭氣を帶びて居つたのである。其の有樣の一般を述べて見れば、特に武家時代の流行たる禪僧は、相變らず此の時代にも、幕府の爲めに最も尊信を受けた。彼の京都鎌倉の五山十刹は此の時大に發展した。殊に尊氏は夢窓國師を深く信

天台と法相

じ、之が爲め天龍寺を建立して、自ら弟子の禮を以て其の示誨を仰いだとの事である。夢窓國師の高弟に尤も有名なるは、圓覺寺義堂と相國寺絕海であつて、義堂は義滿の師匠となり、義持は絕海に參禪した。特に絕海の如きは幕府の外交を司り、支那朝鮮等と往復せる文書の類は、皆な此の人の意志で決行したのである。されば此の時の禪僧は、元來三界を捨てたる身でありながら、北條時代の如く足利幕府の信任するに乘じて、卑怯未練にも尙ほ名聞利欲を貪つて居つたのである。

然らば天台法相は何うであるかと云ふに、是れ又た大に幕府のお蔭を蒙つた。殊に園城寺派は、北朝の血統たる特明院の御系統を助けて功があつた爲め、足利氏の最

負を受けて頗る勢力を張つた。南都及び山法師に至つては例に依つて雙六の賽や賀茂河の水の様に、陛下でさへも御自由にならなかつた。況して諸大名の爲めに、其の實權を取られて居る處の足利氏などの、如何とも處置する事が出來なかつた。處が往々驕慢なる義教が、之を鎮壓せんと企てたが、結極失敗に終つたのである。彼等法師は、全體武人の集合であつたから、中には暴行無道の命知らずの惡僧が多く、動もすれば山徒は日吉の神輿を擁して强訴に及び、又た東大興福の兩寺は神木を奉じて入洛すると云ふ有様であつた。其の上山門と寺門との爭烈しく、合戰燒討などの絶え間がなかつたのである。斯く天台法相も亦た慈悲忍辱の佛詔を信じながら、敢て三

逆を犯して、我慢の幢を逞うして居つたのである。

之に反して眞言密教では、其の教風奇拔なる所がない故、柔耎なる公卿共の陰遁所としては、最も適當して居つた様である。故に門跡なるものが澤山出來て、貴族名門の子息が其の後を繼ぎ、決して平民から出る事の出來ない僧系が顯はれた。彼の宇多法皇を開祖とせる御室仁和寺の如きは、京都眞言宗の中心となつて、法皇や親王様方は代々此の寺の長者となつた。六代將軍義教の前半生も青蓮院の僧侶であつたから、彼は非常に眞言の僧を尊信した。されば三寶院滿濟の如き、元と權大納言師冬の子であつて、義持義教の政治に參與し、世に彼を黑衣の宰相とまで申した位である。而して彼等柔弱無力なる

貴族の化身僧侶は、徒らに修驗道などを多く設けて、自分の修行が上達し僧位の昇るのを樂んで居つた。是れ彼等は、正に精神的修養に依つて煩惱を斷ち、眞如の德を顯はさんとする佛敎を轉倒して、單に形式的祈禱に依て物質的の快樂を得やうとして居つたのである。

全體之等の諸宗は、既に平安朝の末期から腐敗しかけて、此の時代に於て其の極點に達したのであるが、之より先き鎌倉時代に於て、之等の墮落せる佛敎を改革せんとして現はれたる二大宗敎がある。是れ即ち淨土眞宗と日蓮宗の二宗である。然しながら此の時代には、此の二宗も他宗の感化を受けて、往年の覇氣は殆んど見る事の出來ない狀態となつた。眞宗は曾て親鸞聖人の女覺信尼

の孫覺如が、京都に本願寺を建立し、此の時代の末には蓮如聖人あつて、本願寺の法主となり、大に布敎に盡力したけれども、一向專念阿彌陀の他力敎は武門の信仰や公卿の安心としては、少しく不相應であつた爲め、足利隆盛時代には餘り思はしくなかつた。是れ此の宗旨では、學術や理論を主としないから、幕府の爲政上には左程必要を感ぜられなかつたし、亦た一方では物質的の祈禱と云ふ事を重じない爲め、迷信の流行したる此の時代の要求には、少しく適當しなかつた故であらう。然し是れは此の宗旨の固有の性質であるが、時代の同化力は、遂に此の宗をも祈禱的ならしめ、亦た戰爭にも從事せしめた。全體眞宗は公卿や武士には、餘り弄ばれなかつたけれど

も、其の教の平易なると、及び其の説の悲觀的で厭世の趣きを持つて居るのとが、此の有爲轉變の浮世を直接に感じた處の平民に取つては、最も能く適當して居つた爲めに、此の時代の下層社會の間には、非常に弘まつたのである。是れが爲め山門や南徒の妬を受け、度々僧兵共が押し寄せて來た爲めに、眞宗も之が防禦として、是非戰爭しなければならなかつた。斯く始めは消極的の要求から戰爭したのであるが、後ち足利末葉に至つては武士と合同して、或は本願寺一揆となり、或は北越一向一揆となつて、非常に亂暴を働く樣になつたのである。誠や世が世として、阿彌陀樣さへ、身には甲冑を着け、手に劍を持つ樣になつたとは、甚だ歎かはしき次第ではないか。

五、隆尊の思想系統

最後に我が日蓮宗の有樣は、何うであるかと云ふに、足利十四代義輝の時に於ては尤も盛んで、其の享祿天文の頃即ち隆尊入滅後凡そ三十年位も後には、全國を通じて末寺八萬、京都に二十一本山巍然として並び、法華を信じない者は耻の樣に思つたとの事である。是れ日蓮宗創立以來の一大隆盛期であつたが、遡つて斯かる隆盛を來たしたる由來を尋ぬるに、高祖の滅後、彼の六老僧中で日持上人は世界の布教に一身を委ねられ、日興上人は富士の麓野に本化六萬坊の大戒壇を建立せんとし、日昭

妙顯寺建立の由來

日朗の兩上人は各々高祖の遺訓を奉じて、界内布敎に從事された。特に日朗は比企及び池上を中心として、關東の傳道に一身を委ねられ、伏見天皇の永仁二年の頃から、其の弟子の日像をして畿内地方の布敎に趣かしめ、日像上人始めて京都に來り、先づ後醍醐天皇の御依頼を受けて北條氏滅亡の祈禱を致し、遂に建武中興の世となつたので、其の功に依て妙顯寺を建立する樣になつたのである。是れ日蓮宗の公許を得て、京都布敎に就いた最初である。然るに日像の弟子妙實尊者は、元攝政藤原經忠の子で、眞言宗大覺寺の御門跡であつたが、非常に將軍尊氏の歸依を受け、延文年間勅を拜して、桂川に雨を祈り頗る靈驗があつたとの事である。妙實の下に朗源、朗源

日存上人と日道上人

の門に日霽日實が居つたが、悉く足利氏の尊信を受けた。日實は始めて關西地方布敎の端を開き、京都に妙覺寺を建てたが、日霽は龍華嗣法となり、鎌倉比企に倣ひて寺號を妙本寺と改め、將軍義滿の外護を得て大に規模を宏大にした。日霽の本には月明、日實、日存、日道、日立の五人、其の尤も重なる者で、此の内日實は京都に立本寺を開いた、以上妙顯、妙覺、妙本の三寺は、三諦具足山と稱して京都に於ける一致派の最初の根本道場である。月明は日霽上人の後を繼いで妙顯寺の嗣法となり、自ら朝庭立願寺の上足であると云ふので、頻りに月卿雲客と往來し、日夜權門に諂ふ事をのみ仕事として居つた。彼の護國利生論と云ふ書を著して、時の天子後小松帝に奉

り、御氣嫌を伺がつたが如き實に其の重なるものである。次に日存、日道の兩人は、日隆上人にとつては肉緣の叔父に當る方であるが、日存は特に學識に秀で、日道は殊に德望が高かつた。此の兩上人は佛性院日慶等五人の重なる同志と共に日霽上人の晩年妙顯寺の山中は、月明の黨派盛んに跋扈して、風紀愈々紊亂するのを歎き、遂に妙顯寺を立ち退いて、內野と云ふ所に閑靜なる草庵を建てゝ爰に移つて居つた。後ち日像上人布敎の舊跡柳屋の地に卯木山妙蓮寺を再建し、其の傍に佛性院と名くる學室を作り、兩上人は此の學室に於て日夜勤學せられ、御一生を終つたとの事である。次に日立は卽ち日霽の門下に居つた時の日隆上人であつて、叔父なる日存日道の兩

日隆上人の思想は日存日道兩師の學說を大成せるもの也

上人が世を憤慨して內野の草庵に去らんとするや、日立も月明を排斥して兩上人と其の行動を同じくし、屢々妙顯寺へ行つて月明を諫めた。かく日立は存道兩師と志を同じくし、亦た學を等くしたから、此の兩師の影響を受けた事は、敢て申すまでもない。卽ち日立の思想の理論的方面は日存に依て開發せられ、其の實踐的方面は日道に依て導啓せられたので、後ち日立が八品派なる一宗を建てられたのも、實は此の兩師の學說を、單に大成し組織だてたものに外ならぬ。されば御聖敎の中に、或は仰に曰くと云ひ、或は口傳に曰くと云ひ、又た像師流に曰くとあるは、高祖日蓮上人より日像を通じて、日存道に來れる、一大思想系統を意味せるものである。特に在々

所々仰に曰くと云ふ言葉の多きより見れば、御聖教の大部分は、全く存道兩師の學説を解説講義したものに過ぎないと云つても、過言ではあるまいと思ふ。故に妙蓮寺内證相承血脈之次第條目の中に曰く

妙本寺義絶の後、本應寺より已來、當門流化儀化法の再興は、日存日道に限る事。と

亦た本門弘經抄に曰く

此の法門は日存日道師弟より日隆相承申す法門也。

と

之等を以て見るも、日隆上人の思想の根源の如何を見奉る事が出來るのである。今上人の思想系統と、並びに此の時代に於ける京都日蓮宗の系統を圖解すれば、次の如

くである。

此の様に日隆上人は、朗門の系統を延いて居るが、足利當時に於ける京都日蓮宗の勢力は、殆んど朗門一派の爲めに壓倒せられて居つた。日像開立の妙顯寺派の頗る

本國寺建立の由來

京都に榮へた事は、前述の如くであるが、日像の寂後三年卽ち貞和の初め、日靜亦た京師に來り、鎌倉本國寺の寺基を京都六條に遷し、之れより京都本國寺の道場が成立した。爾來日靜の法系たる日傳、日聰、日經などが、此の本國寺を根據として、盛んに關西地方に傳道し、且つ彼等の多くは當時の名家と交際して、朝廷や幕府の祈禱を承はり、非常に權勢を張つたのである、斯く朗門の日蓮宗は、一は妙顯寺を中心とし、他は本國寺を中心として、都の天地を獨專すると云ふ有樣であつたが、然も其の黨派の中には、多く名門貴族の出家した者が居つた。彼の尊氏と親類の關係ある三位日靜を始めとして、護良親王の御子日叡、近衞道嗣の子息日秀の如き、卽ち其の

日蓮宗徒の墮落

重なるものである。

以上朗門正統派は、日隆上人の時代には、旭天の如く非常に繁昌したが、斯く盛大になるにつれて、次第々々に內部の腐敗を生じ、又た外部から來る反抗の聲も澤山あつた。卽ち例に依て叡山の僧徒は、日蓮宗の日に增し繁昌するのを見て、空しく涎を呑んで居る事が出來ないで、種々の口實を構へ僧兵を率ゐて、日蓮宗の寺院を襲撃した。されば日蓮宗の方でも、亦た之が防禦の爲めに、僧兵を蓄へ或は武士の手助けを借りた。且つ一方では淨土宗や直言宗との爭論甚だしく、只だに宗論の爲め口角沫を飛ばしたのみならず、其の上腕力に訴へて爭つた。此の合戰には、當時の權勢家細川三好等の諸大名も關與

し、武士は宗教の力を利用して野心を猛しうし、僧侶は武士の腕を借りて他宗に迫害を加へようとし、各々念佛や題目の旗幟を飜へして、實に有らう事か、三衣を身に着けて、弓矢の間を跋渉して居つたのである。

六、時代精神の三大通弊

全體平安朝の佛教が、其の末期に及んで頗る隨落したが爲め、其れを改良せんとの使命を以て生れたのが、鎌倉時代に現はれたる新佛教である。然るに其の新佛教の魁斗たる淨土眞宗や日蓮宗さへも、足利の中世に至つて斯くまで腐敗して、又も平安朝末期の舊佛教界の有樣に、

逆戻りしたかの感がある。今此の時代の宗教界卽ち出世間界に於ける通弊を擧げて見れば、種々の方面から考へる事が出來るが、先づ大略次の三ケ條に結歸する事が出來やう。

第(一)當時の佛教界は、所謂御用爲政家、或は御抱へ祈禱者であつて、一種偏狹なる階級的の宗教となつて居た。故に此の時の僧侶は、恰も藝人が旦那の御氣嫌を取る樣なもので、朝な夕な、公卿や武門のお髯の塵を拂ふ事にのみ憂き身をやつし、只だ〳〵高位方の歸依を得て、自分の位の昇進する事を無上の樂みとして居つた。元來彼等の多くは、武士や公卿の成れの果てゞあるから、何うしても高踏我觀の境を樂しむ樣な、高潔なる精神はない。

勿論眞理探究などの知識上の希望もあらう筈がないのである。只だ願はくば再び俗世に出でゝ一旗擧げんものと思つて、陰かに風雲の機を待つて居る胸に一物ある坊主であつた。されば僧侶は政治上の騷動や戰爭が起れば、早速乘り出す樣な有樣であつた。世間でも亦た之を認めて、俗臭を帶びて居る高位高官の僧侶を大に尊信した。故に門跡なる一種の階級的の僧侶は、當時非常に勢力があつたとの事である。されば此時代の佛敎に於ては、釋尊の敎たる一切平等の化益は既に亡んで、平民の救濟などは一向顧みなかつたし、且つ顧みる暇も無かつたのである。

(第二)當時の宗敎は、全く物質主義に化してしまい、大に

迷信を鼓吹したのである。一體足利時代の人民は、明け暮れ戰爭にのみ從事して居つたから、全く學問上の知識を缺いて居つた。從つて物の道理が明かでない。されば精神的の宗敎をば、凡て物質上の滿足を與へてくれるものと意得て居つた。故に彌陀であらうが大日であらうが、但し稻荷でも毘娑門でも乃至鰮の頭でも、物質上の快樂さへ與へてくれるものは、盛んに信仰した。僧侶御自身も本より金や名譽などの物質崇拜者であつたから、斯かる人民の弱點を得たり賢しと捕へて、人魂、怨靈、狐狸の變化等を說き、或は病氣の平癒を祈り、或は戰勝を願ひ、及び旱魃、飢饉、難產に至る迄で、皆な其の災害を免れん事を祈禱したのである。斯く此の時の佛敎は、三

界唯一心の佛説に背いて、只管物質上の滿足にのみ力を容て居つたので、是れ亦た當代出世間界の一大弊害であらう。

最後に臨んで、廣く佛敎界全體を觀じても、亦た狹く日蓮宗内を見ても、當時の宗敎は皆な權實本迹の間を混動して居つた。禪宗や眞言宗等の八宗十宗は云ふ迄もないが、特に之を我が日蓮宗の上に於て見るに、當時は日蓮宗の僧侶は、朝廷幕府の歸向を得んが爲めに、高祖日蓮上人の御眞意たる本迹勝劣、折伏修行の説を曲解して、本迹一致の説を唱へ攝受の修行を重ずるものは多かつたのである。彼の勅願寺として都下の日蓮宗を代表して居つた所の妙顯寺の月明や本國寺の日傳日聰を始とし、關

東の日澄、亦た日蓮の再生と迄に尊信せられたる身延の日朝など、大に一致説を主張した。往々中山の系統に屬する本法寺日親の如き、盛んに折伏修行を行つたけれども、是れ殆んど大海の一粒に過ぎなかつた。されば佛敎は悉く權迹の敎となり、日蓮宗の天地は正に渾沌として、全く天台化し終らうとし、高祖の四個の格言さへ、哀れ果敢なくも、今は昔の夢となつたのである。

七、日隆上人の宗敎改革

越中の僧深圓が、威大なる希望を抱ひて、年僅かに十四歳の時、遙々都の空に上り、伯父なる存道兩師に傳を

日隆上人は傳説的世界の破壞者也

求めて日霽上人の弟子となつた頃は、意外にも當時の宗教界は斯の如く非常に墮落して居つたのである。全體始めから深圓の求むる處は、斯かる餓鬼道や修羅道の樣な世界ではない。卽ち平靜不動なる寂光土、所謂我が此の土は安穩なり、天人常に充滿せる出世間の世界を要求したのである。曾つて深圓は、一國の城主たる武門の家庭に生れて、何不足ある身ではないが、只だ安心の出來ぬのは、人法の無常と道德の廢頽とであつた。一言で申せば世間の荒波の餘りに動搖するのを厭ひ、之を解脫せんとしたのである。其こで武門を去つて遂に佛門に歸した。處が田舍の佛門こそ、稍々出世間界の樣に思はれたが、都に出でゝ廣く佛門全體を大觀すれば、案外にも出世間

の趣きは影も形もなかつた。實に佛門の動搖は武門處ではない。武門の動搖は、却て佛門の餘波に過ぎない樣である。されば深圓は、武門にても又た佛門にても、已に出來上つて居る古臭い此の世界では、到底安心を求むる場所のない事を自覺した。かくて數十年來無常に惱める深圓は、始めて何等か心中一導の光明に接する事が出來た。茲に於て今迄の遺傳的世界を全々破つて、新に理想通りの別天地を創造し、自ら朗門一致派の日立を脫して、天上天下唯我獨尊の日隆上人となり、遂に古今未曾有の新生活に入り込んだのである。其の別天地の創造に就ては、應永七年存道兩師と共に、妙顯寺を去つて內野の草庵に移つたのを起源として、後ち後花園天皇の永享元年

京都本能寺を再建し、其の梵閣成就の際に、上人は四帖抄を書いて、京都日蓮宗の十六大本山に回送し、整々堂堂と自分の理想を建設せられたる時を以て完成したのである。然らば此の上人獨得の新天地とは、如何なるものであらうか。是れ卽ち我が本門法華宗である。

斯の如く日隆上人の新生活は、時代に反動して起つたので、其の新設の理想世界は、正に腐敗しつゝある此の時代を改革す可き性質を持つて居る。是れ實に上人の新時代を作つた所以であつて、上人を宗教的偉人として見る可き重なる點であるが、其の理想世界は、如何なる性質を持つて居るかと云ふに、次に述ぶる三大特長は、遺憾なく日隆上人の眞精神を發揮したるものであると信ず

る。

八、隆尊の新世界

(一) 上人の平等主義

日隆上人の宗教は、頗る平民的であつて、四海平等の主義である。されば上人は、當時に於ける多くの僧侶の如く、朝廷に接近して其の爲政者ともならないし、又た幕府の御氣嫌を取つて其の指揮者ともならない。是れ權門に阿諛して居つた所の妙顯寺嗣法月明を、度々諫め排斥せる有樣を以て見るも、之を知る事が出來る、特に應

月明の非行

永十七年上人は、月明の非行十ケ條を擧げて、烈しく彼を諫曉した。其の十ケ條の內

第五、法事葬式の場所に帶刀の士を召し連れる事

第六、恒に弓箭を用意し、合戰の企に相似る事

第八、常に堂上武門に交はり、名利を求め高官に昇らんと欲する事

第十、俗姓貴き者に於ては、學期不德之輩たりと雖も或は高位に叙せしめ、貫首職に任せしむる等の事

以上の四ケ條は、上人が全々階級的の宗敎を破壞せられたる立派な證據である。且つ現在本興寺及び本能寺の什物等を調べて見るに、時の朝廷又は將軍から賜はつた

雨山の什物

日隆上人の布敎方法は折伏の中の攝受也

處の御敎書の樣なものは殆んどない。故に上人は、當時の權門輩とは、餘り交際をしなかつた。譬へ交際をしても、其の氣嫌を取るなどゝ云ふ事は、絕對的に好まなかつた事が明了である。只だ上人の非常に努められたのは、此の戰爭と暴政とに苦んで居る一切衆生に、安心を與へてやらうとした事で、苟も法を求むる者あれば、譬へば、旃陀羅の如き賤民であつても、千里を遠しとせず、賤が伏家、海士が苫屋にも、單身出掛けて敎化せられたのである。彼の尼ケ崎の米屋治郎五郎や、就賀の紺屋五郎右衞門などを敎化せられたる有樣を見ても、如何に上人は、平民主義を實行せられたかを窺ふ事が出來る。且つ月明が使はしたる六人の刺客を懇々導かれた事や、又は敦賀

の眞言宗大正寺圓海を、三日間晝夜寢食を忘れてまでも折伏せられたる事を見ても、上人は決して人を撰んで敎化すると云ふ事はなかつた、實に正邪善惡皆な是れ平等の敎化を蒙らしめたのである。尙ほ亦た上人の尤も直接に建立せられたる尼ケ崎の本興寺と京都の本能寺とは共に一宗の大本山でありながら山號を持つて居らぬ、全體當時は各宗通じて、寺院に有難そうな山號を附けて、自分の寺が一番えらいなどゝ威張る事が大に流行したる頃であつたが、上人は大に之に反對せられた。否な斯かる俗めかしい流行などには、全く頓着しなかつたのである。卽ち此の山號は、一種の貴族的宗敎の產物であつて、平民的なる上人の主義には、甚だ不適當であつた。上人は

寺院を決して僧侶共の觀念修行の場所ともしないし、又た當時流行した處の門跡の如く、貴族の隱居所ともなさぬ。勿論金閣寺や銀閣寺の如くに、大名共の遊山場ともしない。只だ上人は寺院を、人民に安心を與へてやる可き布敎場であると思はれたから、階級的宗敎の用ゆる山號を廢して、一般貴賤貧富を問はず、皆な共に妙法の法樂を味ふ可き所である事を示したのである。されば或る隆祖傳（三井居住の人の撰なりと云ふ）に曰く

兩本寺山號なき事、末法は下種益の時なり、入衆申通の節なり、聚洛田里の會場に於て、不信謗法の四衆を集め、執情謗實の緇素に對して、不輕折伏の行を立てゝ破近顯遠の法を弘む、然れば則ち山林の居住に恊

上人の人間觀

ふ可からず、故に山號無し。と

斯く上人の主義とする所は、單に朝廷や幕府の如き上層社會をのみ相手とせず、悉く一切衆生卽ち此の日本國延いては世界萬國の救濟を目的とし、佛の敎の如く世間に充足する事、誠に雨の普く潤ほすが樣であつた。彼の武士と云ひ、又た公卿と云ふも、上人の目から見れば、田夫野人と何等の異る處はない、皆な是れ本未有善の衆生、即ち未だ曾つて下種せざる凡夫に過ぎないのである。されば弘經抄大意にも

末法惡世は能く能く之を見れば、十方淨土擯出の衆生此の娑婆世界に來れり、尙ほ在世を追ひ出されて正像に來り、正像より尙ほ末法に追出されし沙汰外の惡人

法華經の平等觀

なり。

と仰せられて居るのである。

以上の樣に上人は、當時頗る勢力を持つて居つた處の階級的宗敎を改革せんが爲めに、大に平等主義を鼓吹せられたが、果して此の主義は何處から來たのであるかと云ふに是れ又た決して偶然に顯はれたるものではない。吾輩は法華經の精神と日蓮上人の意志とを、上人は遺憾なく實現せられたるものだらうと思ふ。其の證據は卽ち

法華經壽量品に曰く、如來は一切衆生の大施主なり。同藥草喩品に曰く我れ一切を觀る事、普く皆な平等にして、彼此愛憎の心あること無し。と

かく法華經は、種性の差別を固執する事なく、一切法界

日蓮上人の平等視

を平等に取扱つて居るが、之を高祖に於て見るも亦た同様であつて、高祖は全く法華經を生命として居つたのである。即ち

初心生佛抄に曰く、利根鈍根等しく法雨を雨らすと說き、一切の菩薩阿耨多羅三藐三菩提は皆な此の經に屬せりと說くは如何に、是等の文の意は利根にてもあれ、鈍根にてもあれ、持戒にてもあれ、破戒にてもあれ、貴もあれ、賤もあれ、一切の菩薩凡夫二乘は、法華經にて成佛得道す可しと云ふ文なるをや。と

之を以て見るに日隆上人の平等主義は、必らす法華經と日蓮上人との眞意を直接に繼承し、以て當時宗教界の墮落を改革したのである。

上人の排祈禱論

信心法度

二、上人の精神主義

日隆上人は平等主義を實行し、出來得る限り社會全般に接近しやうとしたが、決して世間の爲めに俗化せらると云ふ事はなかつた。即ち上人の宗教は、平等の利益を目的とせられたが、其の利益は決して物質的欲望の滿足ではない。上人の人民に與へたるものは、宗教上の安心と道德的の教化とで、共に情神的のものである。宗教の物質主義は、單に形式を重じ、讀經、祈禱、咒法などを頗る貴ぶ風があるが、上人は精神的の宗教を弘通せられたから、余り祈禱などを重じないのである。されば實

德三年二月の信心法度の第二ケ條目に曰く

一、巫覡つかうべからず、同じく瘧おとさせ、萬の祈禱さすべからず。と

又た月明諫曉十ケ條の中にも

第四、法事に懺法を修し、山門の風儀に如同する事

第七、勤化法談の會場に器物を出して、米錢を集むる事。と

之等は全く上人の物質主義に對する三十棒である。且つ此の事を上人の事跡に就て見るも、上人は如何に形式的宗教を排斥せられたかゞ分かる。曾つて上人は、日道上人の仰せを受けて、尼ケ崎に布教せられた時、此の地の領主細川右京大夫滿元の夫人が懷姙して居つたが、夫人

は常々男子を所望して居られた。處が卜部掃部頭と云ふ占考者が之を見て、夫人の胎兒は女子であると云つた。其こで滿元は、上人の高德を聞き祈禱に依て、胎兒を男子に變せしむるやうにと、其の使三度に及んだけれども、上人は斷然固辭して承知しなかつたが、遂に滿元自ら來り强て請はれたる爲め、上人も是非なく請合はれたとの事である。亦た上人が御兩親の御墓を見舞い古郷から歸へる途中難船に遇ひ、色ケ濱と云ふ處に漂着せられた時に、此處には非常に疫病が流行して居つた。其故に村人等は上人に祈禱を以て、此の疫病を消滅せしめん事を願つた。然るに上人は『余は醫者ではないから病氣を治療する事は出來ない。然しながら諸經の王たる法華經を一

心に自ら信仰せば、必らす病卽消滅の利益ある可し』と仰せられたのである。斯かる實例を以て見るも上人は當時流行せる祈禱などには、決して重きを置かない。寧ろ精神上の信仰に依て、區々たる此の生老病死の物質的境界を、離脱する事を務められたのである。

上人の大義名聞論

次に亦た上人は、大義名聞と云ふ事を重ぜられ、人民を敎化するにも、親には孝なれ君には忠なれと、五倫五常の道德を以て敎へられた。彼の月明諫曉十ケ條も、悉く月明の人格の背德道的である事を非難したものに外ならぬ。就中左の三條に於て、尤も明に此の事が示されて居る。卽ち

月明の背道德

第一、先師霽公(日霽上人)持律眞固なれども、他の非を

制せざる故、衆徒放逸なりし事。

第二、當時其弊風相募て、山內(妙本寺)倍々非梵行の輩多き事。

第三、當宗の意、受持妙法の外に、事の戒法を用ひずと云ふ事。

桃井家の再興

上人はかく月明を非難せるのみならず、自ら大に道德を實踐窮行せられたのである。彼の應永二十三年上人は、京都本能寺に居られたる頃、桃井家の老臣中村元成(後ち越中本成寺日永上人となる)と云ふ者が尋ねて來て、逆臣元助の爲めに桃井家の御領地を奪はれたる故に、何卒一度歸鄕して先祖の爲め惡賊等を誅せられん事を、涙を流して上人に願つた。其の時上人の仰せらるゝには余は是れ出家の身であるか

ら、軍旅に出る譯には出來ぬ。然し汝の告ぐる所は卽ち孝道忠節であるから、默止して居る事も出來ない。されば、予書を作つて舊臣に贈るから、汝之を以て義兵を擧げよと、直に御書と及び、上人十歳の時、卽ち未だ武士であつた時の影像一體を彫刻して元成に與たとの事である。亦た上人五十五歳の時、桃井家一門の武士が戰死せる舊跡を葬ひ、厚く廻向したとの事であるが、之等の事實より見ても上人は、如何に仁義忠孝の道を尊崇せられたかを推察する事が出來る。

河内布教

（或る傳記に依れば、斯波義將戰死の場所云々の說あり。是全く虛說にして信ずるに足らず。太平記には南朝の臣北畠顯信と桃井直信同直常と、和泉の境八幡山に於て戰ひ、桃井の兵殘りなく討れ

日隆上人の教は世法卽佛法一念三千の翻譯也

法華經の道德觀

たりしが、此頃の京童部は此の桃井兄弟合戰の處を桃井塚と名づけたりとあり。上人の行きしは此の桃井塚には非ざるか。）

斯の如く日隆上人の敎は、純然たる精神主義であるが、是れ實に當代の僧侶が大に迷信を鼓吹し、人民の恐怖心に付け込み、祈禱を賣つて陰かに名利を貪り、滔々として物質主義に沈溺して居つた當時に於ける一大革命の光明ではあるまいか。

法華結經に曰く、父母に孝養し、師長を恭敬し、正法もて國を治め、人民を邪誑せず、力の及ぶ處に不殺を行ぜしめ、但深く因果を信じ一實の道を信じて、佛は滅し給はずと知る可し。と

是れ最もよく法華經の精神主義なる事を示したるもので、

之を高祖の教に見れば卽ち。

道妙禪門抄に曰く、祈禱に於て顯祈顯應、顯祈冥應、冥祈冥應、冥祈顯應の祈禱ありと雖も、只だ肝要は此經に信心を致し給ひ候はゞ現當の所願滿足ある可く候。

と又た

四條抄に曰く、日蓮は少より今生の祈り無し、只だ佛に成らんと思ふ計り也。と

以上の御抄は、讀經、祈禱等は必らず信仰を根底に置ねばならぬ。卽ち形式的儀式は枝葉であつて、信仰は根本である事を說かれたのである。其の道德の主張に就ては、或は曰く夫れ一切衆生の尊敬す可きもの三あり、所謂主師親是也と、或は苟も佛法を習はん者、父母師匠國の恩

を忘る可きやと申されて居る。之等は日隆上人以前に於ける尤もよい精神主義の手本であると思ふ。されば上人の精神主義も、決して系統なしに現はれたるものではない。必らずや上人は、精神主義を本旨とせる法華經を日蓮聖人の御指南に依て、當に足利時代に於て實現せられたるものである。

三、上人の八品正意主義

一、各派の由來

然らば上人の主張せられたる安心の內容は何んである

か。其の道德の根定となる可きものは何んであるか。所謂日隆上人の精神主義は、如何なる根據を有して居るかと云ふに、是れ卽ち本迹勝劣本門八品の所說である。一體上人の出世せられたる時は、宗論の最も盛んなる時代であつたが、特に宗內の法論は頗る見る可きものがあつた。實に此の足利中葉後に於ては、日蓮宗外部の隆盛のみならず、其の敎理の方面も亦た長足の進步を爲したのである。されば尤も混動し易き天台宗と日蓮宗、又た日蓮宗中の一致派と勝劣派の宗義の差別の如きは、此の時に頗る明かに發表せられた。元來日蓮宗敎理上の爭は大體二區別する事が出來る。卽ち一致派と勝劣派是である。其の一致派は六老僧中日昭日向の系統から多く出て居る

が、之に極力反對の矛を向けたのは、日興の門下卽ち富士興門派である。日朗上人の系統に至つては甚だ複雜であつて、後世續々異流を唱ふる者輩出し、其の一致派に屬するか、將た勝劣派に屬するかを、直に判斷する事は出來ぬ。されば日朗上人の敎義に就ては、歷史上大に研究す可き價値があるかと思ふ。

抑も日蓮宗が斯く二大分裂を生ずるに至つた最初の原因を尋ぬるに、古來學者の說種々あるが普通一般の說に依れば、始め高祖が六老僧に御自身示寂の後は、輪次に身延山の御墳墓を守る事を遺言せられた。然るに弘安八年の事日向の當番中に檀越の波木井氏は、輪次交代の制度を廢して、日向の永く留住せられん事を願つた。日昭

日朗等は皆な之を許したが、獨り日興は次の輪番に當つて居つた故に、高祖の遺命を固く守り、遂に身延を下り富士山下に大石寺を建立し高祖の衣鉢を傳ふと稱へ、日向等と絶交し對抗する樣になつた。是れ卽ち日蓮宗第一の分派である。之を以て見るに第一の分派は、重に感情上の確執に過ぎなかつた樣である。然し興門派の方では、波木井氏の行爲には多く謗法の事實があつたとて、其れは重に實主張するが譬へ謗法の事實があつたと云ふ事を踐的方面の事で、敎理上理論上の爭ではなかつた樣に思はれる、然りながら日興上人が、高祖の親講を筆受せりと云ふ御義口傳を拜見しても、且つ中老日辨日秀及び日向上人を非常に抗擊したる天目の如き、本迹勝劣を主張

したと稱せらるゝ高僧等が、悉く日興上人の門に集つたのを見ても、日興は確かに本迹勝劣を唱へたる事が明である。されば敎理上の爭も第二次的原因として見る可きもので、決して閑却してはならぬ。然るに一段分派成立の曉には、必らず確固たる敎理上の根據を要求するに至る。其こで日興の門下が大に宗義を講究し、後ち漸く第二次的原因が增々發展して、却て是れが分派の唯一理由と見る樣になつたのであらう。其れより約百年位の後、日常日高の系統卽ち中山系に屬する日尊の門下に、日什上人と云ふ人が居つた。日什は元比叡山の學頭で、始め天台の學を修め顯密の敎に通じたる人である。康曆二年六十七歳の時、開目抄及び如說修行鈔の二篇を讀みて大

に悟り、中山日尊に歸宗し、後ち京都に於て本迹勝劣從淺至深の義を唱へ、永德元年造寺弘法の綸旨を賜り、遂に康應元年妙滿寺派なる一派を建立した。是れ日蓮宗第二の分裂で、當時京都に於ける勝劣派の泰斗であつた。然るに日朗上人の門下九老僧の中で、殿中問答で有名な日印は、古鄕越後に本成寺を建立した。其の日印の弟子に日靜日陣の二人あつて、日靜は京都に本國寺を建立し、日陣は八歳にして本成寺に投じ、後ち本國寺日靜の門に入り、更に本迹勝劣を唱へ本成寺派なる一派を開いた。應永四年日陣上人は、日靜の弟子本國寺日傳と本迹勝劣の義を論じ、手紙を以て議論を交ゆる事前後八ケ年に及んだ。此の諍論には日陣の弟子日登なる者をして往

復の使としたが、日登其の由を知らず年を重ね使ひする事既に數十回に及び、漸く疑を發し途中で開封して、始めて本迹論なる事を知つたとの事である。是れ日蓮宗内に於ける第三の分派であつて、然かも本迹勝劣に關する法論の最初であらうと思ふ。

兎に角此の時代の日蓮宗は、一致派、興門派、妙滿寺派、本成寺派の四派に分離して居つた。然し京都に於ては獨り一致派のみが權門の御氣に入り非常に繁昌したが、他の勝劣派は頗る振はなかつた。只だ妙滿寺派と本成寺派とは、日蓮宗中の新宗敎として見る可きものがないでもない。特に前者の如きは、什門六老の一たる妙滿寺第三世日仁の樣な英傑出でゝ大に傳道布敎に努めたとは云

へ、到底一致派の勢力に對抗す可くもなかつた。日隆上人は斯かる宗義の混亂しつゝあるを非常に憤慨し、殊に朝廷の勅願寺たる妙顯寺内部の紊亂に對しては、極力矯正せんと努めたのである。元來妙顯寺内は、霽公派と月明派即ち時代の輕薄なる風潮に反抗せんとする硬派と時代の俗流に順應せんとする軟派との二派に分れて、早くより暗に壓力を生じて居つたが、然しながら霽公在世には流石の月明も多少遠慮する處があつた。處が應永七年霽公入滅、月明其の後を繼ぐに及んで專横至らざる處なく、遂に宗義を曲解して本迹一致を唱へた。始めは只化儀の方面即ち宗敎上に關する儀式作法が、頗る廢退して居つたと云ふ迄であつたが、之が次第に高じて今や化法

の方面即ち宗敎上の主義及び信條をも、破壞するに至つたのである。茲に於てか霽公派と月明派とは愈々暴發し諍論止む事がなかつたが、遂に應永二十五年一大衝突が始まつた。其の結果化儀の方面に關しては、霽公派は一先づ媾和を申込んだが、其の化法の方面に至つては、全く月明派の敗北となつた。然しながら月明は、前述の如く多く武門と交を結び世俗の勢力が强かつた故に、腕力に訴へて霽公派を壓服せんとした。其れが爲め霽公派に關する二十餘人の者が、思ひ〳〵に妙顯寺を退去したのである。此の時霽公派の頭領となつて、月明と大に本迹勝劣の義を論じたのは、即ち我が日隆上人であつて、是れ陣師が本國寺日傳と法論してより後、日蓮宗に於ける

日隆上人に對する日蓮各派の影響

本迹勝劣に關する第二の法論である。

日隆上人の一派（四帖抄を各本山に回送せる時を以て開宗起源となす）を開いた時は、日什上人が妙滿寺派を開いてより約四十年後で、日陣上人が本成寺派を建てゝより三十年位後である。御聖敎を拜讀するに、所々一品二半或は壽量一品の説と本成寺派の説とを擧げて辨駁して居る。特に私新抄を見れば、本國寺派の諍論に對する明細なる批評を拜讀する事が出來る。之等を綜合して見れば隆師は、妙滿寺派本成寺派の二派に對して、尤も深く御研究遊ばされたる事が明である。殊に日陣上人は同世の先輩で、京都本應寺（本能寺の舊名也）の名は此の陣師の付けたる名であつて、且つ日學上人（隆師の弟子也）の兩門和合決の説に依れば、隆師が月明と法論し妙顯寺を立

教理と相承

退いた時に、越後に行つて陣師に謁し、初めて宗門の樞捷を探り細く本法の奇密を聞いたと迄云つてある。されば日隆上人は本成寺派とは、尤も親しく交際して居つたのである。

二、各派の主張及び其の略評

各派の主張を見るには大體二ツの方面がある。其の一は敎理に關するもので、其の二は相承に關する説である。即ち敎理とは法華經の哲理は、如何なるものであるかと云ふ問題の解釋であつて、相承とは其の哲理が如何なる方式に依て吾々に傳へらるゝか、又た吾々が悟り得るか

と云ふ問題を釋解したのである。換言すれば前者は化法の方面であつて、後者は化儀の方面とでも云ふ可きものであらう。

先づ化法の方面から云へば之等日蓮宗の四派は、本より日蓮上人の敎を奉じ、法華經を以て其の所依として居る事は悉く一致して居る。然しながら譬へ同じく日蓮上人の敎を奉じ、法華經を所依として居つても、各々其の見る所や重ずる點を異にし、法華經本迹二門の價値に對しては、大なる相違を持つて居るのである。今大體各派の主張する所を聞くに、第一は本門の價値を全く迹門に還元し、決局本迹の區別を認めず本迹雖異不思議一と談ずるもので、所謂一致派是れである。第二は本門と迹門

とを相對して本勝迹劣を論ずるもの、即ち陣師の本成寺派である、第三に本迹の相對を越へて、本門中に更に壽量の一品を以て最要とするもの、即ち什師の妙滿寺派と興師の興門派との二派は、之に屬するものである。

第一に一致派の所說は、迹門の諸法實相の理體を重じ宇宙一切の現象の絕對無差別をのみ論ずるのである。其の結果餘りに理想を誇張し、現實をも悉く理想化してしまい、現象、現實、實際などと云ふ事を認めない缺點がある。斯くては佛を信仰する必要もなければ、又た世の中に善だの惡だのゝ區別もなくなる。されば斯かる哲學的根據を持つて居る處の宗敎は、信念の腐敗と道德衰頽の時代を救濟す可き、我が日隆上人の精神主義が要求す

る宗教ではない。されば上人も

迹門の意は『此の法法位に住して世間の相常住なり』と云ふて俗諦常住之を談ず、然りと雖も不變眞如と押へて事常住を明さず（四帖抄）

と仰せられて居るのである。

第二、陣師の所説は、必竟唯だ壽量一品を取つて法華經一部の至要とするが、然し此の派で尤も盛れに主張するのは、二經六段の判釋である。故に二經六段の判釋は此の派の中心思想であると見てよからうと思ふ。二經六段とは法華一部を本迹二經に分け、此の二經に各々序正流通の三段を分けて、本迹を相對して本勝迹劣を論ずる。而して更に進んで迹門の正説たる方便品の諸法實相と本

門の正説たる壽量品の久遠實成とを對比して、結果本門の所説たる久遠實成を以て最勝のものとするものである。然しながら此の派の説く所の久遠實成の古佛は、無始無終の法身佛であるかの如く解釋して居樣であるから、一致派の説く所の諸法實相と大差がない。只だ所顯の客觀に重きを置かないで、能顯の主觀に多少注意を拂つたと云ふ迄であつて、未だ充分に實際的の意味を有する樣になつたとは云ふ事が出來ない。從つて二經六段の判釋の如きも既に天台宗に於て明に示せる所であつて、日蓮宗の特色とす可きものではない。故に日隆上人は此の判釋を『要するに本迹釋にはあらず、權實釋なり』と説かれて居る。されば此の派の説も、日隆上人の宗教が要求す

可き哲學的の根據とするには足らないのである。

第三、什師一派の所說は、一部修行本迹勝劣從淺至深と稱して、迹門は影であつて淺劣、本門は體であつて勝深であるとする。而して本門の中の正宗一品二半を以て所依とし、壽量品の久遠常住の佛の上に應身顯本を說くのである。されば應身顯本は、此の派の最も重要とし且つ特色とする所である。此の應身顯本の所說は、佛に對して多少人格的の要素を與へたる點はあるが、然しながら必竟在世脫益の法門であるから、實際上末法相應の敎と云ふ事が出來ない。且つ一面から見れば、此の說は或は信仰の客體の威信を害する事がなからうかと思ふ。故に日隆上人も、一品二半は尙ほ『迹中の本』の本門なり

と斷定されてあるのである。次に興師の興門派の所說に依れば、本門十四品の中に於て後の六品を還迹流通とし簡んで八品を取る、八品の內に於て簡んで正宗一品二半を取り、更らに一品二半の中唯壽量の一品を取つて本門の樞要とし、而して一往は末法流通の上行菩薩を說くけれども、最後の結論は本成寺派や妙滿寺派の樣に、在世脫益の法門に歸するのである。故に是れ又た末法現在の宗敎たる日隆上人の哲學的根定となる可きものではない。要するに妙滿寺派は壽量所顯事の一念三千の妙法蓮華經と稱へ、興門派は壽量文底秘沈本因妙法蓮華經と唱へて居る。共に壽量品を以て一部一經の極地として居る點に於ては全く同一である。且つ興門派が壽量品の中に本因

を認めたる點は、恰も妙滿寺派の應身顯本を說くのと同じ要求に迫られたるものゝ樣に見へる。されば未た以て共に本迹勝劣の徹底せる理論ではないのである。

相承の方面より見たる各派

相承の方面から各派の主張を見れば、大體二ッに區別する事は出來る。即ち一は血脈相承、他は經卷相承である。血脈相承の方は人と人との相承である。即ち高祖の知識其儘を、師弟の順序に從つて時間的に傳はつたものでなければ、所謂日蓮宗の系統とする事が出來ないと唱へるのである。經卷相承の方は人と人との相承ではない。敎理を繼承する所の系統である。されば必らずしも高祖師弟の金口にのみ依る必要はないので、法華經或は日蓮上人の遺書に依ても悟り得るものとするのである。日蓮

宗四派の內、前者に屬するものは、一致派、興門派、本成寺派の三派であつて後者に屬するものは獨り妙滿寺派是である。

一致派

一致派、興門派、本成寺派は共に從上向下の形式に依て人と人との相承方法を取るのである。一致派にては日朗上人日向上人等は、高祖より直接に宗旨を傳受した。特に日向上人には法義傳受の筆記として、日向記なる一部の書籍がある。而して日向上人は身延の系統を作り、日朗上人は鎌倉京都の系統を作り、代々師資相承したのである。

興門派

興門派にては日興上人は直接に高祖から相承を受け、御義口傳、祖師遺屬の本尊及び二通の書狀を傳へて居る。且つ其の書狀の中には、日蓮一期弘法付屬白蓮

阿闍梨日興可爲本門弘通大導師等の言葉があると云ふ事である。斯くて日興より日目、日道等代々血脈相承を以て正意として居るのである。本成寺派も亦た日蓮上人より日朗、日印、日陣と次第に相承するので、即ち高祖より傳はりたる立像釋迦佛、安國論一卷、赦免狀二通を以て相承の證據として居る。日陣上人の以下も代々順次に此の三品を傳へて本成寺の系統とするのである。思ふに此の人と人との相承は、即ち列傳的の相承とも云ふ可きもので、最も當時の事實や儀式に重きを置くのである。從つて學説上の系統に就ては、前人の説を其儘受け繼ぐ事にのみ汲々として、決して進歩發達の自由を許さない。されば隆尊は此の相承を評して曰く

外相を以て本と爲し、正像乃至小權迹と能弘の知識を本と爲して之を列ぬ。と

然るに以上の三派と全々其の趣きを異にし、從下向上の形式を以て法と法との相承方法を取るものは妙滿寺派である。妙滿寺派は全く外面の儀式に拘泥しない。直授日蓮と云つて直に日蓮上人の精神に感應せんとし、經卷相承と云つて單に法華經の敎理上の系統に依る。故に日什上人は開目鈔、如説修行抄の二卷に依て、忽然高祖の弟子になる事が出來たと云ふのである。此の經卷相承は必竟評論的の相承である。從つて前人の學説に對して新しき解釋を加ふる自由を得る事が出來る。故に隆尊は此の相承を評して曰く

内證を以て本と爲し、開權顯實の意なる可し。と

然しながら此の相承は事實を忘れて空想にのみ傾き、歴史を捨てゝ理論にのみ走る弊害がある。結局純粹なる經卷相承は相承の規定としては、殆んど價値のないものである。要するに血脈の方は門閥的であつて、經卷の方は知識的であるから、共に日隆上人の相承とするには足らないのである。

三、隆尊の根本思想

如何に高遠なる理想にても、我々凡夫と無交渉であつたならば、其は全く隣の寶であつて吾人人類に取つては

日隆上人の哲學は現實中心說也

無價値である。又た如何に性德圓滿の法門にても、其れが修德の法門とならなければ何人の益にも立たぬ、全體一致派は理想を全々客觀的の實相に求めたが、他の勝劣派は一致派の實相は、理論上非常に高遠であるけれども、有意的の我々人間の手本とする事が出來ぬ。何しても人間は人間と同じ性質のものを理想としなければならぬと云ふので、玆に壽量品の久遠古佛を以て理想とする樣になつたのである。されど久遠古佛も尙ほ人間とは少し緣遠いので、妙滿寺派は應身顯本を說き興門派は本因を說くに至つた。然しながら之等諸派は悉く着眼點を理想と云ふ一點に置いた。勿論其の理想が次第に實際的になり現實に接近する樣になつた事は事實であるが、やつぱり

方便壽量の二品は共に理想系統に屬し神力品は現實系統に屬す

五十歩百歩の差たるを免がれぬ。されば方便品や壽量品の思想を中心としては、到底理想と現實、佛と凡夫との間を密接に關係せしむる事が出來ない。斯くて日隆上人は從來傳はれる日蓮宗の敎經に對して、一大革命の旗を飜へしたのである。其の宗義改良の尤も重なる點は先づ次の三ヶ條であらうと思ふ。即ち

一、一致派の方便品、勝劣各派の壽量品に對して、神力品を法華一部の主眼と爲したる事

二、一致派の實相、勝劣各派の佛果に對しては本因妙の上行菩薩を說く事

三、一致派の像法熟益、勝劣各派の脫益を論ずるに對して、末法下種を正意とする事

日隆上人の宗敎は信仰本意也

要するに神力品と云ひ、上行と云ひ、末法下種と云ふも悉く實際を中心として說ける者である。されば日隆上人の哲學は必竟現實を本意として一切の佛敎を研究した者で、實際を離れて理論なく、現實を離れて理想なく、現象を離れて實在の獨存する事が出來ない。理論も理想も實在も、皆現實の中にあつて始て價値ある事を主張せられた。斯て上人の平等主義と精神主義とが、化法上始めて確固たる哲學的根據を有する事が出來たのである。

次に日隆上人の宗旨相傳の說に就ては、必らずしも血脈相承や經卷相承の一ッに偏するものではない。全體相承は信仰を根本とす可きもので、信仰がなければ譬へ外相に如何なる莊嚴の傳付の儀式があつても、又た如何に

教理を悟證しても、決して相承にはならない。若し信仰あれば血脈と經卷とは一致調和せらるゝもので、血脈の外に經卷なく、經卷の外に血脈もなくなる。即ち信仰は人と法とを一體ならしめ、法は必らず人に屬し、人は亦た法に依て其の位を得るに至るのである。必竟相承は信仰である。信仰さへあれば、人の系統から論ずるも、亦た法の系統から論ずるも全く同一であると說くのである。されば私新抄に曰く

此の宗の意は教より外に行證なし。教位に於て證道實義を沙汰し盡せり。教位とは名字の氣分なり。此の教位に於て行證を攝し、名字即の信心の一念に行證を具足せり。六即は但名字の一位、信の一字を以

て初後と分ち、信より外に解行證なし。信是れ道の元、功德の母なり。此を初て知る故に教と名く。教は信なり。末代の行人能所俱に此の位に居し、六即一念一生辨ふ可し。迷へる故に教より外に行證を求む。と

此の御文章の中に教行證と云ふのは、天台宗の所謂三重血脈の事である。此の三重の血脈を二相承に配合すれば始めの教重血脈は純粹なる血脈相承に屬し、後の行證の二血脈は即ち經卷相承に屬するのである。故に此文の要旨を一言すれば、相承は只だ信仰を主眼とす可きもので、三重の相承方式の如きは、單に方便手段に過ぎないと云ふ事を顯はしたのである。されば經卷相承の上より、直

授日蓮、直授日像、直授我等と云ひ得るのも、要するに信仰のある爲めである。信仰の外に血脈相承を立て或は經卷相承を立つるは、是れ名あつて實なき相承、眞の相承ではない。結局日隆上人の相承は妙法信仰の相承である。是れ一面に於ては三派の血脈相承よりも更らに内證の自由を許したと共に、他面には妙滿寺派の經卷相承よりも更らに外相を重じた。然かも日隆上人の相承は、血脈相承の頗る門閥的なるに反して、非常に非階級的であつて、經卷相承の甚だ智者向きなるに反して、頗る下機下根の無知者をも攝する事の出來る門を開いたのである。斯くて上人の平等主義と精神主義とが、化儀の上にも確固たる宗教的根據を有する事が出來たのである。

日隆上人の教行は悉く法華經八品にあり

以上の如く日隆上人の根本思想は、化法の上にては現實を以て中心とし、化儀の方面に於ては信仰を以て本意としたのであるが、之等の思想は悉く法華經の精神と高祖日蓮上人の教訓より感得したのである。特に法華經の八品と高祖の本尊抄とは、日隆上人の思想の根定を形成して居る。上人は凡ての教は、法華經八品を演繹したものに外ならぬ。上人は全く本門八品本迹勝劣を主張せられた。其の化法も又た其の化儀も、悉く本門八品の解釋である。三千餘帖の御聖教は甚だ廣汎ではあるが、必竟ずるに此の八品を各方面から説明したものに過ぎない。故に四帖抄に曰く

本門八品上行要付を以て眞實の經釋と爲す。是れ滅

後下種の爲めなり。此の時法華經一部の經旨極成するものなり。釋尊諸佛出世の本懷此の時滿足するものなり。と

又た一帖抄に曰く

一代諸經は本門八品上行要付の方便なり。かくの如く意得る時は今日一代諸經のみならず、三世十方微塵の經々も皆な悉く本門八品上行要付の方便也。と

實に此の八品の思想こそ、上人の哲學及び宗敎の依て來たる根源であつて、且つ時代の革命の動機となつたのである。故に上人の上人たる所以は、此の八品の主張であつて、法華經八品は上人をして偉大たらしめたのである。遡つて之を高祖に於て見るに、本尊抄に曰く

此の本門の肝心の南無妙法蓮華經の五字に於ては、佛猶ほ文殊藥王等にも之を付屬し玉はず、何に況んや其の以下おや。但だ地涌千界を召して八品を說いて之を附屬し玉ふ。(中畧) 是の如きの本尊は在世五十餘年に之れなし、八年之間但だ八品に限る。と又た

新尼御前御返事に曰く、今此の本尊は敎主釋尊五百塵點劫より心中にをさめさせ給て、世に出現せさせ給ても四十餘年、其後又法華經の中にも迹門はせすぎて、寶塔品より事おこりて壽量品に說き顯し、神力品屬累に事極りて候しが。と

吾々は之等の御遺文を拜讀して密かに高祖の御意志を推し奉つるに、高祖は必らず本門八品を以て法華經の尤も

日隆上人は八品の實現也

肝要なるものとされた樣である。然し高祖は一切經を悉く八品に依て組織したのではない。只だ高祖の思想の中には、八品の說の萠芽も存在して居つたと云ふ事に過ぎぬ。故に日隆上人は此の高祖の陰れたる意志即ち內鑑冷然の邊を愈々發輝せしめ、遂に此の八品に依て法華一部を組織した。否な之に依て一代諸經を統一し、宇宙全體を八品化してしまつたのである。されば上人が本門八品本迹勝劣を唱へ、新宇宙を創造せられたのも、遠くは釋尊、近くば高祖日蓮聖人の御精神を意識的に組織し、之を實現せるものに外ならないのである。

九、結論

我が日隆上人は前述の如く、其の肉體上から見ても又た精神上から觀じても、明確なる系統を有し、決して系統なしに此の世に出られたのではない。即ち其の肉體上から見れば、清和源氏の末裔、桃井家の子孫であつて其の精神上から觀ずれば、高祖六老の隨一たる日朗上人の法系に屬して居るのである。故に上人の肉體も又た精神も共に大なる一系統中の一小部分に過ぎない。連綿として絕えない歷史の中の一斷面に外ならないのである。されば歷史上の一人として上人を考へるより外に、何等か

日隆上人は歴史的及び社會的にのみ存在す

他の方法に依て上人を知る事が出來ない。然かも日隆上人一代の思想及び活動は、云はゞ時代に依て導かれ、時代に依て開かれたのである。即ち上人の平等主義は、當時の階級的潮流に對し、其の精神主義は當時の物質的潮流に對し、其の本迹勝劣八品正意の説は當時の權實本迹混合の思想に對して起たのである。故に上人の行爲は當代の社會を改良す可き見本であつて、上人の教義は當代の社會を改革す可き聲であつた。上人の全生涯は決して社會を離れて成立するものではない。されば社會の一人として上人を考へるより外に、何等か他の方法を以て上人を知る事が出來ない。要するに上人の一生は一面には歴史的に抗束せられ、又た他面には社會的に規定せられ

て居る。時間と空間とを離れて、上人の眞面目を明にせんとする事は全く不可能事である。

上人は曾つて武門の家庭に長直として生れたが、長ずるに從つて痛切に時代の無常を感じ、遂に落髪黒衣、法名を深圓と呼んだ。一小片地の深圓は亦た空しく臥龍の思を抱いて居る事は出來ない。單身大都會に出でゝ決然一國の日立となつた。然し朗門の日立も又た甚だ陳腐である。斯くて全く天上天下唯我獨尊の日隆上人となり異つた。上人の最終目的は暗に始めから獨尊の境界を要求して居つたに相違ないが、色々の階段を通過して明に此の境界を意識し得たのは、是れ全く時代の手引きに依るものと云はねばならぬ。されば時代は上人をして偉大な

日隆上人は時代の覺醒者也

らしめ、上人は亦た時代に順應し其の要求に從つて活動したのである。故に上人を見るには決して時代を忘却してはならぬ。時代を離れて考へたる上人は、即ち空想の上人であつて生命のない冷然極まるものである。是れ吾人の如き血の氣もあり、又た呼吸もして居る生きたる人間に取つては、甚だ緣遠きもので相距つる事西方十萬億里以上であつて、吾々の兎や角申す可き限りではない。吾人の大に研究す可きは、此の足利治世に於て時代の覺醒者として顯はれたる慶林坊日隆上人である。即ち吾々の如く肉體も有し、又た精神も有する歷史上、將た社會上の事實としての上人である。

斯の如き事實の上人こそ、誠に非凡なる感化力を持つ

て居つた。即ち日信、日登、日明、日禎、日興、日增の六老僧を始めとして、關東に於ける本果院日朝上人、西海に於けゝ定源院日典上人の如き、共に身命を惜まず、隆尊の意志を奉じ、隆尊の新世界を盛んに此の世に實現せんと努力した、又た京都の本能寺、尼ヶ崎の本興寺の兩本山を始として、泉南の顯本寺、南越の本勝寺、淡島の妙勝寺、備前の本蓮寺等皆な上人の敎化にかゝるものであつて、上人の說く處、上人の行く處一として其の感化に浴せざるものはない。かく上人の言行は、外に向つては革命の大獅子吼となり、內に對しては興樂の迦陵頻伽の聲となつた。是れ上人を指して世界未曾有の宗敎肌の偉人であると云ふ所以である。

十、隆尊御一年代表

佛後	皇紀	聖滅	年號	事蹟
二	二	一	南朝 元中二 北朝 至德二	○南朝後圓融帝、北朝後小松帝の御宇○足利三代將軍義滿の始世○十月十四日隆師は越中國射水郡淺井鄉高村に於て誕生し幼名を長一麿と稱す、誕生の際老翁出でゝ護身の劍を與ふと云ふ○本果院日朝上人甲州休息にて生る
三	三	二		
四	四	三		
五	五	四		
二	二	一	三	○長一麿二歲
三	三	二		
四	四	三		
五	六	五		
二	二	一	四	○長一麿三歲
三	三	二		
四	四	三		
六	七	六	嘉慶元	
二	二	一	五	○妙滿寺派開祖日什上人獨立して一派を爲す○八月南朝の臣楠正勝北軍と戰ふ
三	四	七		
七	八	七		

二	二	一	六	○日什上人二位僧都に補せられ且つ地を賜ひて京都に妙滿寺を開基す
三	四	二		
三	五	三		
二	二	一	康應元	
九	九	八		
三	五	〇	明德元	
三	〇	一	七	○長一麿六歲乳母より妙經一部八卷を授けらる○下總埴谷妙宣寺開堂供養に於て眞間日滿中山日尊身延日叡との間に七條衣謗法の爭論起り中山身延遂に義絕す○將軍足利尊氏の爲めに法華八講を修す
二	二	一		
九	〇	〇		
四	三	二	八	○長一麿七歲讀書習字を學ぶ記憶甚だよし○日什上人將軍義滿に面訴して肯かれず、京都を去りて故鄉會津に遁世す
五	五	四		
一	一	〇		
二	二	一	九	○大內義弘兩朝の和を治む、南北五十六年始めて一統す○妙滿寺日什上人年六十九歲示寂○義滿法華萬部會を修して戰死者を弔す○後小松帝閏十月五日神璽を受く
四	五	二		
一	一	一		
二	二	一	三	
三	〇	二		
四	五	三		
二	二	一	四	○四月後圓融院崩御す○龍華日霽上人義滿より地を給ひ伽藍を宏大にし寺號を妙本寺と改め比企に徙ふ
三	〇	二		
四	五	三		

二	二	一	應永元
三	〇	一	
四	五	一	
三	四	三	
二	二	一	二
三	〇	一	
四	五	一	
四	五	四	
二	二	一	三
三	〇	一	
四	五	一	
五	六	五	
二	二	一	四
三	〇	一	
四	五	一	
六	七	六	
二	二	一	五
三	〇	一	
四	五	一	
七	八	七	

○山門の僧徒法華の宗號を沮む、日霽上人蜚徒と闕廷に於て對論し宗號の綸旨を以て彼等を破る○義滿太政大臣に任ず

○義滿落髮法名を道義と云ふ○八月北御所にて法華懺法を修す○洛の妙顯寺義滿の外護を得て更らに規模を擴む

○長一麿十二歳越中遠成寺慶壽院を師とし五月十日出家得度す、法名を深圓と呼ぶ

○隆師十三歳慈母益子九月廿六日卒す、享年三十二歳、越中國婦負郡布市村に桃井家代々の廟所ありと云ふ○本成寺派開祖日陣上人法華經二經六段の所判に依て本勝迹劣の義を主張し本國寺日傳と法論を開く

○隆師十四歳上洛、肉緣の叔父なる存道兩師の傳に依り妙顯寺日霽上人に師事す○朝鮮使來朝す○妙滿寺三世日仁義滿に面訴す

二	三	四	八
二	〇	五	九
一	一	八	
			六
二	三	四	九
二	〇	六	〇
一	一	九	
			七
二	三	五	〇
二	〇	六	一
一	二	〇	
			八
二	三	五	一
二	〇	六	二
一	二	一	
			九
二	三	五	二
二	〇	六	三
一	二	二	
			十

○中山四世日尊上人寂す○大内義弘反す、戰敗して泉州に死す

○隆師十六歳好學房日存上人精進房日逗上人と共に風儀紊亂せる妙本寺を出でゝ内野に草庵を營む○定源院日典上人薩州種子島に生る○身延七世日叡上人寂す○足利直冬石州に於て死す

○隆師十七歳

○隆師十八歳再び妙本寺に登りて日霽上人を諫む、霽師用ひず亦たも妙本寺を去る○明の建文帝書を義滿に寄し日本國王と爲す

○隆師十九歳

二	二	一	十一
三	〇	二	
五	六	二	
三	四	三	
			○日陣上人と日傳上人と論爭する事八ヶ年、遂に本成寺と本國寺と全く分離し本成寺は勝劣の一派を成す
二	二	一	十二
三	〇	二	
五	六	二	
四	五	四	
			○龍華四世日霽上人寂す壽五十七○霽師の弟子月明妙本寺を繼ぐ ○隆師二十一歳存道兩師と共に月明の法號を難ず、極月廿七日月明遂に懺悔起請文を三師に致して和解す
二	二	一	十三
三	〇	二	
五	六	二	
五	六	五	
			○隆師二十二歳日陣上人の弟子日存、日信、日登等の諸師と共に本迹勝劣の義を論究す○龍華月明上人護國利生論を造りて後小松帝に奉る○天下大飢饉
二	二	一	十四
三	〇	二	
五	六	二	
六	七	六	
			○隆師二十三歳三井山門南都高野等を徧歴して學を求む○本法寺日親上人生る
二	二	一	十五
三	〇	二	
五	六	二	
七	八	七	
			○五月足利三代將軍源義滿薨ず享年五十一

二	二	一	十六
三	〇	二	
五	六	九	
八	九	八	
			○六條本國寺五世日傳寂す
二	二	一	十七
三	〇	二	
五	七	二	
九	〇	九	
			○隆師二十六歳諸山の宗義を探り四天王寺に入りて一代藏經を閲す其後越後に下向し本成寺日陣に相見え本門の要義を伺ふ○隆師存道兩師と共に十ヶ條の非行を擧げて月明を諫曉す、存道兩師は學友と議り柳屋の舊地に妙運寺を建立す○五月官領斯波義將薨ず享年六十一
二	二	一	十八
三	〇	二	
六	七	一	
〇	〇	〇	
			○隆師二十七歳嚴父尙儀公釋門に入り法衣を着し名を本光と改む○本成寺派日陣上人洛の堀川に本禪寺を建つ○龍華月明大僧都と爲る
二	二	一	十九
三	〇	二	
六	七	二	
一	二	一	
			○義滿の子義持は兩院の別當源氏の長者に補せられ細川滿元官領となる
二	二	一	二十
三	〇	二	
六	七	三	
二	三	二	
			○稱光天皇即位

二	三	六	三
二	〇	七	四
一	三	三	三
二十一			

○隆師三十歳亦たも諸國を歴歴して法を求む○十月廿五日存道開師起請文を月明に致し妙本寺に歸山して再び宗義を興さんとす

二	三	六	三
二	〇	七	五
一	三	三	四
二十二			

○隆師三十一歳京都油小路通り高辻と五條坊門との間に本應寺を建立し日存上人を崇敬して元祖とす、是れ本能寺の創にして當門第一の建立也○嚴父尚儀公四月五日卒す

二	三	六	五
二	〇	七	六
一	三	三	五
二十三			

○隆師三十二歳桃井家の老臣中村元成の爲めに御敎書及び十二歳の時の影像一軀を彫刻して與ふ、後隆師故國に下向し亡父の遺跡に一寺を建立して元成寺と稱し、本成寺と改む、元成後ち發心して日永と呼び本成寺第二祖也、本成寺は高岡本光寺の初也○妙滿寺三世日仁寂す

二	三	六	六
二	〇	七	七
一	三	三	六
二十四			

○上杉禪秀極樂寺に入りて自殺す

二	三	六	七
二	〇	七	八
一	三	三	七
二十五			

○隆師三十四歳三月廿日盟文を月明に入れ且つ具國を本應寺に招請して妙本寺に歸山す、然れども月明と本迹一致勝劣の違目を爭論するに及び四月存道隆三師を始め其の黨徒全く離山す○月明本應寺を破却し隆師を暗殺せんとす、隆師京を去り河内三井村に於て本嚴寺を創す○義將の子義重卒す

二	三	六	八
二	〇	七	九
一	三	三	八
二十六			

○隆師三十五歳道師の仰に依て攝津尼崎に布敎す○顯本寺初祖日淨上人生る、淨師は斯波氏の俗眷也と云ふ○本禪寺日陣寂す

二	三	六	九
二	〇	八	〇
一	三	三	九
二十七			

○隆師三十六歳攝州尼崎の領主細川右京大夫滿元より同地八幡宮の地を給ひ本興寺を建立し日道上人を崇敬して元祖とす

二	三	七	〇
二	〇	八	一
一	四	三	〇
二十八			

○三月廿六日妙蓮寺五世好學院日存上人內野の草庵にて寂す壽五十六

二	三	七	一
二	〇	八	二
一	四	一	一
二十九			

○行學院日朝豆州宇佐美鄕に生る○本能寺三世日信上人生る○本興寺三世日登上人生る

二	三	七	二
二	〇	八	三
一	四	二	二
三十			

○隆師三十九歳今年迄前後四ヶ年の間に本興寺諸字悉く成就す○義持長子義量征夷大將軍に任ぜらる○義持落髮法名道詮と云ふ○朝鮮王大藏經を獻ず

二	三	七	三
二	〇	八	四
一	四	三	三
三十一			

○二月十七日妙蓮寺六世精進院日道上人内野の草庵にて寂す壽四十二○四月南朝後龜山院崩御す○五月廿六日越中本成寺日永上人寂す○本能寺四世日明上人生る

二	三	七	四
二	〇	八	五
一	四	四	四
三十二			

○二月五代將軍義量薨す享年十九

二	三	七	五
二	〇	八	六
一	四	五	五
三十三			

○隆師四十二歳五月古鄉越中に下向し先祖の宗廟を拜す、歸京の途次色が濱の禪寺金泉庵の僧靜慮を信伏せしめて本隆寺を建立し、且つ敦賀の眞言宗大勝寺圓海と法華眞言の勝劣を問答し遂に改宗せしむ、今の本勝寺是也○本能本興兩山中興六祖日興上人攝州に生る

二	三	七	六
二	〇	八	七
一	四	六	六
三十四			

○本勝寺日從上人(圓海)福井の附近一乘が谷に正法寺を建立す○日親上人立正治國論を造りて幕府を諫む

二	三	七	七
二	〇	八	八
一	四	七	七
正長元			

○正月足利四代將軍義持薨す享年四十三○七月稱光帝崩御す

二	二	七	八
二	〇	八	九
一	四	八	八
永享元			

○後花園天皇卽位○隆師四十五歳本能寺再建を計り京都河端に本堂を造る、四帖抄を製作して諸山に回送し本法弘通の趣意を公言す○十月廿三日隆師妙蓮寺内證相承血脉次第七ヶ條を擧げて存道兩師を妙蓮寺歷代に列せんとせしが佛性院日慶大に反對す、爾來五十五年間兩門義絶す○義敎爲將軍

二	三	七	九
二	〇	九	〇
一	四	九	九
二			

○將軍義敎千僧供養を行ふ、法華宗一同制法の由を述べて之に參加せず官之を許す○本興寺四世日禎上人生る

二	三	八	〇
二	〇	九	一
一	五	〇	〇
寧			

○正月廿八日本勝寺日從上人寂す享年八十三○種子島布敎第二祖日良上人淡路に生る○高祖百五十年忌

二	三	八	一
二	〇	九	二
一	五	一	一
四			

○隆師四十八歳

二	三	八	二
二	〇	九	三
一	五	二	二
五			

○隆師四十九歳本應寺を京都六角大宮西坊門に移轉新築す、此の時應を能に改む○八月彗星現す○十月後小松帝崩御す○本國寺八世日聽寂す○將軍義敎比叡山を攻む○妙蓮寺八世日應上人生る

二三八三	二〇九四	一五三	六	○山徒神輿を奉じて京を侵す
二三八四	二〇九五	一五四	七	○隆師五十一歳京都本能寺に於て始めて本果院日朝上人と面談問答す、兩師の宗義同一符節を合するが如し、朝師は岡宮光長寺安息立正寺の中興にして關東に於ける八品宗の中堅也、十三問答抄は隆朝兩師の問答筆記なりと云ふ○山門嗷訴義教兵を遣して之を攻む
二三八五	二〇九六	一五五	八	○隆師五十二歳京に常照院を建立す○鎌倉に於て日蓮天臺の對論あり天臺敗論して之を管領持氏に讒し爲めに日蓮義禁斷の法難を起す
二三八六	二〇九七	一五六	九	○隆師五十三歳
二三八七	二〇九八	一五七	十	○隆師五十四歳京に慈眼院、圓光院を建立す○隆師直弟不行院日曉上人は備前窟牛の法華堂を再興して經王山法華寺と名く、是れ本蓮寺の初也○妙蓮寺七世日忠上人生る

二三八八	二〇九九	一五八	十一	○隆師五十五歳河内に行化して桃井一族忠死の遺跡を尋れ、石川郡加納村に法華寺を建立す○隆師此の頃より泉州堺港に弘通を始む○本法寺日親上人再び立正治國論を獻じて將軍義教を諫む
二三八九	二〇一〇	一五九	十二	○隆師五十六歳妙顯寺月明本迹一致の義を執つて屢々師と論戰す○將軍義教日親上人を捕へて獄に投じ遂に火鑪を頭に冠せしむ、鑪冠日親の號之より起る○九月龍華五世月明寂す
二三九〇	二一一〇	一六〇	嘉吉元	○四月結城合戰あり○六月足利六代將軍義教赤松滿祐の爲めに殺せらる○南都興福寺の僧徒東大寺を襲ふ○六條本國寺炎上す
二三九一	二一一〇	一六一	二	○隆師五十八歳中國に巡教し淡路妙勝寺僧檀を歸伏せしむ○若狹小濱本承寺日遵上人は妙顯寺を離末して隆師に從ふ、遵師は本勝寺日從の俗弟也と云ふ○本能寺六世日增上人生る○將軍義勝日親の爲めに本法寺を建つ
二三九二	二一一〇三	一六二	三	○足利七代義勝薨す

七九三二	六九三二	五九三二	四九三二	三九三二	
八〇一二	七〇一二	六〇一二	五〇一二	四〇一二	
七六一	六六一	五六一	四六一	三六一	
五	四	三	二	文安元	
○天下飢饉	○京都南禪寺天龍寺共に炎上す	○隆師六十二歳	○本國寺七世日殿寂す	降る○八月南方の宮方諸國に蜂起す ○隆師六十歳十二月十二日自ら本能寺大流信心戒條目三ヶ條及び起請文を書して一山の衆徒をして添く遵奉せしむ○三月洛中大小豆雨	

二〇四二	一〇四二	〇〇四二	九九三二	八九九三二	
三一一二	二一一二	一一一二	〇一一二	九〇一二	
二七一	一七一	〇七一	九六一	八六一	
二	享德元	三	二	寶德元	
○隆師六十九歳本興寺堂前の櫻樹を以て堺の佛工淨慶をして自像を彫らしめ入とす○隆師開渋顯本宗業集の御筆始めあり	○六孝第二日登上人師の譜を受けて本興寺の實主となる○細川勝元再び管領に任ぜらる	○隆師六十七歳堺の顯本寺を成就し高弟日淨上人を推して初祖と爲す○薩州の僧林慶なる者淨師を通じて隆師に師事す是れ即ち日典上人也○二月朔日隆師信心法度十三ヶ條を遵りて京山信師に贈る○三月一日隆師本興寺闘法職に就て末來遺言狀を書す	○隆師六十六歳五月法華經信者意得の一章を記して尼崎領主細川氏の母堂に贈る○二月隆師は讃州本妙寺弘經院法度五ヶ條を定む○十月隆師自ら大本尊を圖して本能寺の常住本尊と爲す○六孝第一日信上人を建つ廿九歳師の嗣を受けて本能寺の實首となる○隆師泉州に顯本寺	○隆師六十五歳直弟日學上人を聞へて西國に流化し備中新庄村に本妙寺を建立して學師を初祖と爲す、又た讃州宇多津に本妙寺を建立せしむ○將軍義政征夷大將軍に補せらる	

二	四	一	七	一	三	○隆師七十歳肖像完成し自ら眼睛を點ず、本興寺開山堂の尊像是也 ○隆師尼崎勸學院に入りて專ら著述を事とす
二	四	一	七	一	四	
二	四	一	七	一	五	○五月晦日兩山二祖日信上人寂す享年三十四○六老第三日明上人師の命に依り本能寺貫首となる
二	四	一	七	一	六	○後崇光帝崩御す
二	四	一	七	二	七	○隆師七十三歳
二	四	一	七	二	八	○正月兩日現す○太田道灌江戸城を築く○立本寺五世日實寂す

二	四	一	八	三	○佛性院日慶上人榮仁親王の御子日應上人を請じて妙蓮寺の嗣法とす、日忠上人應師を助けて蓮山を造營す○兩山三祖日登上人寂す享年三十八歳○六月十八日六老第四日頭上人師の命に依りて本興寺貫首となる
二	四	二	九	寛正元	○八月六老第五日興上人闕白一條兼良公の爲めに妙經要品を講ず○淡州妙京寺の僧日良尼崎に於て日典上人に會し師弟の契を結び三島弘法を約す
二	四	二	一	二	○完源院日典上人六十一歳隆師の元に修學する事十ヶ年、生國薩摩種子島に布教せんと志し尼崎を出發す
二	四	二	二	三	○四月八日三日並出づ
二	四	二	三	四	○隆師七十九歳五月十三日本能寺法度七ヶ條を製作す○四月廿一日日典上人種子島に弘法して壓石の刑に遭ふて殺さる享年六十三

二	二	一	○隆師八十歳二月十二日都鄙の門弟に回文を遣す○十八日衆徒尼崎に馳集す○二十五日辰刻奄然入滅○廿七日入棺、日明日嶺兩上人勤之○廿九日午刻茶毘○六月中旬典師の弟子日真上人三十四歳薩州に下向し師匠の意志を繼んとす
四	一	八	
三	四	三	五

（附記）　隆師出家及び尙儀入滅の年代に就て、年表と記述と相違する點あり。是れ年表は日芳上人の説に依り、記述は石濱日真師の説に依れるを以て也。吾人未だ兩説の是非を判斷する程確實なる史料を有せず。故に兩説を擧げて暫らく讀者諸君の取捨に任せんのみ。

大正二年三月二十一日印刷
大正二年三月二十五日發行

定價實費金二十錢
郵送料　金八錢

著者兼發行者　東京市本郷區東片町九十四番地　藤丸哲哉
印刷者　東京市京橋區木挽町二丁目十三番地　新井由藏
印刷所　東京市京橋區木挽町二丁目十三番地　新井電新堂
發行所　東京市淺草區吉野町八番地　大獅子吼會出版部
電話下谷二九四二番
振替口座東京二三一六六番

不許複製

325
178

NO.

PATENTED NO. 119016

"F-M"

PAMPHLET BINDERS

are carried in stock in the following sizes

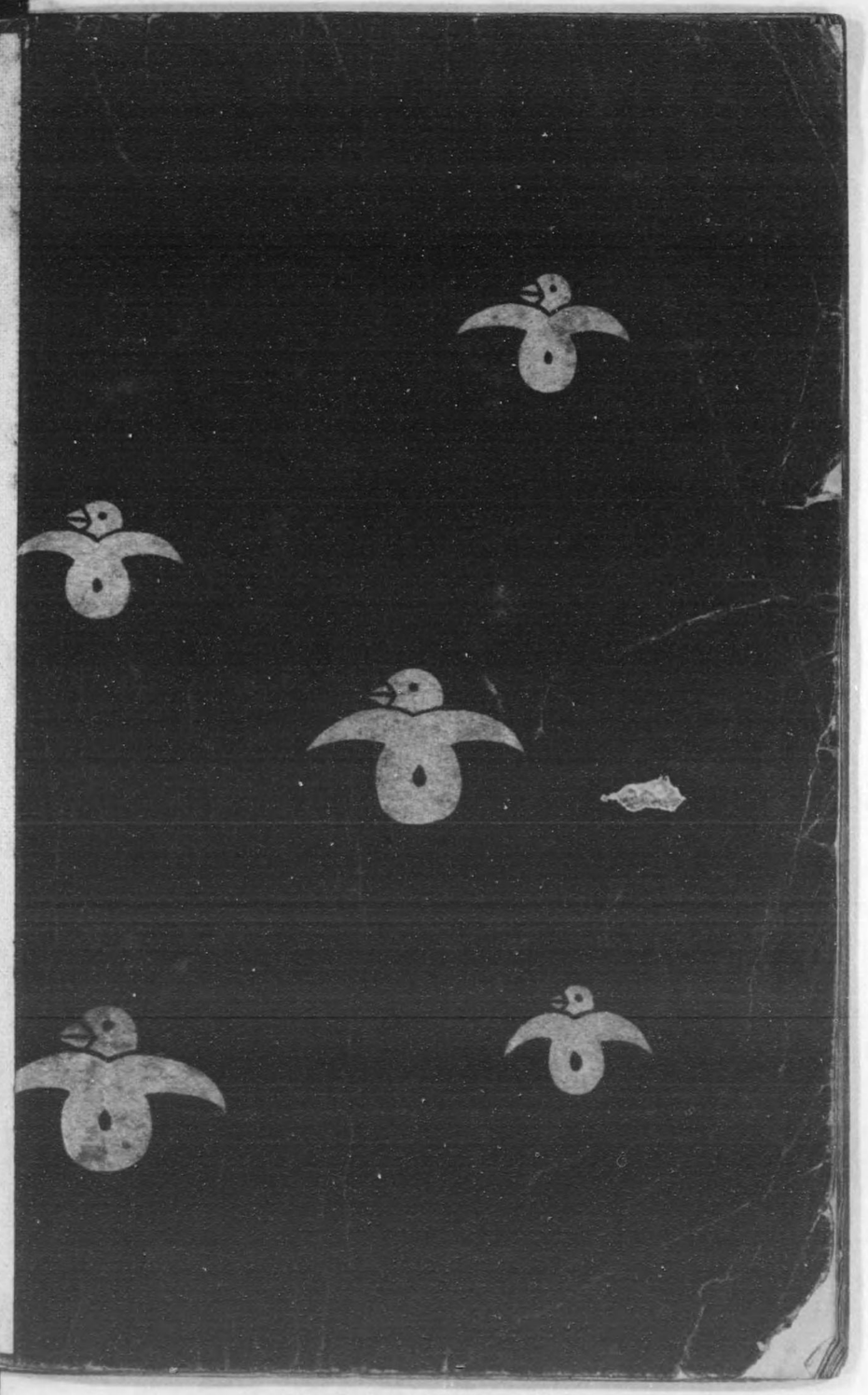
Catalog No.	High		Wide		Thick
851(菊倍)	30. cm.	x	22.5cm.	x	1cm.
852(四六倍)	26. „	x	18.5 „	x	1 „
853(菊)	22.5 „	x	15. „	x	1 „
854(四六)	18.5 „	x	12.5 „	x	1 „
855(特)	24. „	x	15. „	x	1 „

Special sizes are made to order

LIBRARY SUPPLIES IN ALL KINDS

F. MAMIYA & CO.

OSAKA-TOKYO-FUKUOKA



終